

日本地質学会 *News*

Vol.28 No.11 November 2025



一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理 事

任期：2024年6月8日から2026年総会

会長（代表理事） 山路 敦（京都大学）

副会長 杉田律子（科学警察研究所）
星 博幸（愛知教育大学）

常務理事 亀高正男（大日本ダイヤモンドコンサルタント（株））
副常務理事 内野隆之（産業技術総合研究所）
執行理事 岩井雅夫（高知大学）

内尾優子（東京国立博物館）
大坪 誠（産業技術総合研究所）
尾上哲治（九州大学）
加藤猛士（川崎地質（株））
小宮 剛（東京大学）
坂口有人（山口大学）
高嶋礼詩（東北大学）
辻森 樹（東北大学）
細矢卓志（中央開発（株））
松田達生（工学気象研究所）
山口飛鳥（東京大学大気海洋研究所）
矢部 淳（国立科学博物館）

理 事 青矢睦月（徳島大学）
天野一男（東京大学空間情報科学研究センター）
磯崎行雄（東京大学）
大友幸子（山形大学）
岡田 誠（茨城大学）

笠間友博（箱根町役場）
加藤 潔（駒澤大学）
香取拓馬（フォッサマグナミュージアム）
金丸龍夫（日本大学）
神谷奈々（京都大学）
川村紀子（海上保安庁海上保安大学校）
清川昌一（九州大学）
桑野太輔（京都大学）
小松原純子（産業技術総合研究所）
齋藤 眞（産業技術総合研究所）
佐々木和彦（佐々木技術士事務所）
澤 燦道（東北大学）
沢田 健（北海道大学）
沢田 輝（富山大学）
下岡和也（関西学院大学）
菅沼悠介（国立極地研究所）
高野 修（石油資源開発（株））
田村嘉之（千葉県環境財団）
中澤 努（産業技術総合研究所）
西 弘嗣（福井県立大学）
野田 篤（産業技術総合研究所）
広瀬 亘（北海道立総合研究機構）
松田博貴（熊本大学）
道林克禎（名古屋大学）
矢島道子（東京都立大学）
山本啓司（鹿児島大学）
和田穰隆（奈良教育大学）

監 事

任期：2024年6月8日から2028年総会

岩部良子（応用地質（株））
山本正司（山本司法書士事務所）



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156（振替口座 00140-8-28067）

e-mail: main@geosociety.jp ホームページ <http://geosociety.jp>

日本地質学会 *News*

Vol.28 No.11 November 2025

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

日本地質学会第132年学術大会 (2025熊本大会) 報告……2

2025年度受賞記念講演……17

日本地質学会都城秋穂賞「Reminiscences of Akiho Miyashiro」(A. M. Celâl Şengör) / 日本地質学会小澤儀明賞「太平洋に散らばった白亜紀最大の火山活動の痕跡」(松本廣直)

案内……21

シンポジウム『水底の文化遺産：湖底遺跡調査の最新動向』/ 原子力総合シンポジウム2025/ 文部科学省主催 STAR-Eプロジェクト第5回研究フォーラム (研究成果公開シンポジウム)

博物館・ジオパークで地球を学ぼう！……22

岡山理科大学恐竜学博物館：現在進行形の研究現場が見える博物館 (藤田将人・石垣 忍)

CALENDAR……24

地質学雑誌：新しい論文が公開されました……25

支部コーナー……26

関東支部：関東支部講演会「祝・直木賞受賞 伊与原新さん講演会 チガク アオハル—地学は青春だ！—」開催報告/2025年度関東支部功労賞募集のお知らせ

院生コーナー……28

ICDP 2025 Training Course 参加報告 (松山和樹)

表紙紹介……29

第16回惑星地球フォトコンテスト：入選 危峽を貫く (矢崎 煌)

日本地質学会キャリアビジョン誌2025掲載企業募集……30

2026年度の会費払い込みについて……31

巻末 入会申込書

2026 年度代議員選挙の投票 & 正副会長立候補意思表明者にたいする意向調査 が始まります

※WEB 選挙システムによる電子投票です

投票および調査期間：12月11日(木)10時～1月8日(木)17時締切

(選挙活動期間：12月11日(木)～12月29日(月))

選挙の詳細は、学会 HP 会員ページ (要ログイン) もしくは、ニュース誌 9 月号でご確認ください。

日本地質学会第132年学術大会（2025熊本大会）報告

日本地質学会第132年学術大会は、熊本大学において9月14日（日）～9月16日（火）に開催されました。熊本大学では1992年の第97年大会以来33年ぶりの開催で、メイン会場は熊本大学黒髪キャンパス全学教育棟と工学部百周年記念館、市民講演会は熊本市街中心部の桜町バスターミナルに隣接する熊本城ホール会議室で開催されました。また9月13日（土）～9月15日（月）には熊本城ホール展示室で地質情報展が開催されました。

九州・熊本での開催のため、台風や集中豪雨による大会運営への影響を心配しましたが、8月の集中豪雨の影響で一部の巡検でコース変更が生じたものの、本大会はすべて予定通り開催することができました。また遠隔地であり、暑いことで有名な熊本での開催のため、講演申し込み件数が減ることを危惧していましたが、例年並みの件数の発表をいただき感謝しております。本大会の参加登録者数は733名（会員680、非会員53）で、519件の講演申し込みがありました（口頭243件、ポスター276件）。また10件の講演が都合によりキャンセルとなりました（G-O-15、G-O-20、T12-O-2、T3-O-14、G-P-17、G-P-51、J-P-27、T10-P15ほか2件）。

トピックセッション15件、ジェネラルセッション（サブセッション9件）、ジュニアセッションが行われ、発表と活発な議論が行われました。今回は、講演会場とポスター会場がすべて廊下で結ばれた全学教育棟に配置され、酷暑や雨天時にも屋外に出ることなく自由に行き来することができ、参加者には好評でした。

初日の午後開催された表彰式・記念講演会では、山路会長と来賓の磯部博志先端科学研究部長からご挨拶をいただいたのちに、50年会員の顕彰、各賞の表彰式、受賞記念講演が行われました。

地質系業界説明会（対面企画）には最多40の企業・団体にご参加いただき、学生は98名の参加がありました。市民講演会は、地域を特徴づける地質や地形、地球科学に関する基礎的かつ最新の情報をわかりやすく伝えることを目的としており、今回は熊本での開催であることを踏まえ、近年、新たな発見が続いている恐竜化石に焦点をあて、「熊本から始

める最新恐竜学」をテーマに真鍋 真氏（国立科学博物館）に「九州と白亜紀と恐竜学」、大橋智之氏（北九州市立自然史・歴史博物館）に「北部九州の恐竜研究のいま」、黒須弘美氏（天草市立御所浦恐竜の島博物館）に「恐竜の島・御所浦」、池上直樹氏（御船町恐竜博物館）に「御船層群の恐竜たち」の各講演をいただきました。60名ほどのお子さんから年配の方まで集まり、質疑も活発に行われ充実した講演会になりました。

巡検は8コースで、日帰り6コース、1泊2日2コースで、プレ巡検3コース（アウトリーチ巡検1コースを含む）、ポスト巡検5コースでした。8月に熊本地方を襲った集中豪雨により、3つの巡検でコース変更を余儀なくされましたが巡検内容に大きな影響はなく、参加申込総数は168名に上りました。各コースとも参加された皆様の積極的な姿勢もあり充実した内容になりました。特筆すべきは、学部生や大学院生の参加者が多かったことです。多様な年齢層の会員が自主的に交流いただきました。

期間中は、12の企業・団体による展示（株式会社マリン・ワーク・ジャパン、ライカマイクロシステムズ株式会社、メイジテクノ株式会社、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究部門、株式会社建設技術研究所、日本海洋事業株式会社、株式会社森山地質年代学研究所、日本地球掘削科学コンソーシアム（JAMSTEC/J-DESC）、大日本ダイヤコンサルタント（株）/ジーエスアイ（株）、安井器械株式会社、株式会社山屋、兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科ジオ研究領域）および6社より書籍・販売ブース（株式会社朝倉書店、Springer、株式会社ニチカ、株式会社ニュートリノ東京、株式会社東京サイエンス、共立出版株式会社）をご出展いただきました。また、今大会は広告等協賛企業として、4つの企業より協賛をいただきました（三和ボーリング株式会社/株式会社東亜建設コンサルタント/応用地質株式会社/明大工業株式会社）。

例年通り、大会参加者には保育施設の利用料を学会から補助しており、市内の施設も事前に周知しておりましたところですが、2名

の会員から補助申請がありました。今後も、こうした取り組みの充実をより一層図る必要があると思われます。

例年に倣い、LOCの活動について記録を残しておきます。今大会のLOCは、巡検案内書編集委員長を九州大学の尾上哲治会員にお願いし、その他は熊本大学の現・元教員で構成されました（事務局長及び会場担当、小松俊文会員；懇親会担当、可見智美会員；アルバイト及び無線LAN担当、望月伸竜会員；巡検担当、湯口貴史会員；市民講演会担当、田中源吾会員；大学執行部関係、磯部博志会員；実行委員長、松田博貴会員）。熊本大学には後援していただき、会場借用や機材搬入車両の駐車場確保など、さまざまな便宜を図っていただきました。また、熊本国際観光コンベンション協会からは補助経費をいただきました。さらに市民講演会と地質情報展のために申請した科研費とセコム科学技術振興財団研究助成が採択され、財政面では大変大きな助けとなりました。なお、懇親会では熊本の焼酎やワイン、そして郷土料理を取り揃えご満足いただけるものとなったと思います。

巡検案内書は編集委員長の尾上先生の采配の下に一部を除きほぼ予定通りに仕上がりました。編集員・査読者の皆様にも素早くご対応いただきました。設営や運営ではイベント運営会社のおかげでほぼ大きなトラブルもなく実施でき、当日の開催校の負担はさほど大きなものとはなりませんでしたが、また心配しておりました日祭りの会場への交通アクセスや懇親会後の市内への移動も、参加者の皆様の健脚にお手伝いいただき、大きな苦情をいただくこともなく済みしました。

本大会の準備から実施、事後処理につきましては、西日本支部の皆様、高嶋行事委員会委員長、行事委員会の皆様、地質学会事務局の皆様をはじめとする関係の皆様には大変お世話になりました。特に澤木さん、堀内さんの継続的なご助言なしでは開催は不可能でした。また、真剣に取り組んでくれたアルバイトの学生諸君にも感謝申し上げます。学術大会を無事実施できたこと、すべての関係者の皆様に感謝申し上げます。

熊本大会実行委員会一同



左から、煉瓦造りの五高記念館、大会会場入り口、式典にて挨拶する山路 敦会長、来賓：磯部博志 熊本大学理学部長・大学院先端科学研究部長。

日 程

大会の日程概要は次の通りであった。

9月12日（金）

- ・巡検
→Fコース 九州東部のジュラ紀付加体巡検：(9/12-13ブレ1泊)

9月13日（土）

- ・地質情報展2025くまもと一火の国・水の国！大地のふしぎー（13:00～17:00；熊本城ホール）
- ・巡検：
→Bコース 北部九州深成岩巡検（日帰り）
→Gコース 阿蘇火山と神話から紐解くカルデラの生活ー阿蘇ジオパークのサイト巡りー（アウトリーチ巡検；日帰り）
- ・学生・若手のための交流会（若手交流会）（16:30～19:00；桜の馬場 城彩苑）

9月14日（日）

- ・地質情報展2025くまもと一火の国・水の国！大地のふしぎー（9:30～17:00；熊本城ホール）
- ・セッション発表（口頭）（8:45～12:00；全学教育棟）
- ・セッション発表（ポスター）（コアタイム13:30～15:00；全学教育棟）
- ・第23回日本地質学会ジュニアセッション（ポスター）（コアタイム13:30～15:00；全学教育棟）
- ・ランチョン4件（12:30～13:30；全学教育棟）ジオパークの活動内容紹介/法地質学ランチョン/構造地質部会定例会/火山部会
- ・各賞表彰式（15:30～16:10；全学教育棟）来賓挨拶（磯部博志 熊本大学理学部長・大学院先端科学研究部長）
- ・受賞記念講演会（16:10～17:40；工学部百周年記念館）日本地質学会小澤儀明賞受賞松本廣直会員（筑波大学生命環境系）「太平洋に散らばった白亜紀最大の火山活動の痕跡」/日本地質学会都城秋穂賞 Ali Mehmet Celal Şengör氏（イスタンブール工科大学地質工学科）「Akiho Miyashiro: a great geologist, a great teacher and mentor」
- ・懇親会（18:00～20:00；学生会館カフェテリア食堂）
- ・企業団体展示（9:00～17:00；全学教育棟）

9月15日（月）

- ・セッション発表（口頭）（8:45～12:00；全学教育棟）
- ・セッション発表（ポスター）（コアタイム13:30～17:30；全学教育棟）
- ・ランチョン6件（12:30～13:30；全学教育棟）文化地質/岩石部会／支部長連絡会議/ジェンダー・ダイバーシティ委員会/構造地質部会若手発表会/JABEE校情報交換

- ・夜間小集会6件（18:00～19:30；全学教育棟）地質年代用語を考える/J-DESC: IODP3始動！/南極地質研究委員会/環境地質部会/炭酸塩堆積学に関する懇談会/博物館と生涯教育委員会
- ・学生のための地質系業界説明会（対面企画）（10:00～17:00；全学教育棟）
- ・企業団体展示（9:00～17:00；全学教育棟）
- ・市民講演会「熊本から始める最新恐竜学」（14:00～16:00；熊本城ホール3F会議室A1）

9月16日（火）

- ・セッション発表（口頭）（8:45～12:30；全学教育棟）
- ・セッション発表（ポスター）（コアタイム13:30～15:00；全学教育棟）
- ・ランチョン3件（12:30～13:30；全学教育棟）堆積地質部会/地域地質・層序部会合同/海洋地質部会
- ・企業団体展示（9:00～17:00；全学教育棟）
- ・中学・高等学校の理科（地学）教科書に関する説明・意見交換会（15:30～17:00；全学教育棟）

9月17日（水）～18日（木）

- ・巡検
→Aコース 阿蘇火山: カルデラ形成噴火と後カルデラ活動（日帰り）
→Cコース 長崎変成岩巡検（日帰り）
→Dコース 九州中部の黒瀬川構造帯に見られるシルル紀から石炭紀の化石群（日帰り）
→Eコース 天草諸島や宇土半島に分布する上部白亜系姫浦層群の堆積環境（9/17-18, 1泊）
→Hコース 2016年熊本地震の痕跡と布田川断層（日帰り）
→Iコース 御船層群と御船町恐竜博物館（日帰り）

懇親会

懇親会は、大会初日である9月14日（日）に熊本大学黒髪北キャンパス内の学生会館カフェテリア食堂で開催された。懇親会費は前年大会の金額を参考に設定し、正会員7,000円、シニア会員・名誉会員・会員の家族4,500円、学生・院生3,500円とした。学生会館カフェテリア食堂には、熊本県産の肉料理や天草の新鮮な刺身のほか、馬刺し、団子（だご）汁や太平燕（たいびーえん）、高菜飯いきなり団子など地元の郷土料理をとりそろえていただいた。飲み物についても、ビールのほか、熊本産を中心としたワイン、焼酎、日本酒などを豊富に用意していただいた。

懇親会は18時より開始され、LOC委員長の挨拶、熊本大学副学長（研究担当理事）の祝辞、御所浦恐竜の島博物館館長・早坂康隆先生のご発言より乾杯に続き、歓談へと移った。余興などの企画は設けず、地酒と郷土料

理を堪能していただくこと、歓談の時間を十分確保することを重視した構成とした。閉会に際しては、次期開催校である金沢大学の長谷川卓会員より挨拶をいただき、山路地質学会会長に閉会の挨拶をお願いした。

懇親会は立食形式での受け入れ可能上限である約200名の方々にご参加いただいた。今回、懇親会申し込み締切が例年より遅く、開催日の2週間前であった。料理等準備の都合上、発注は1ヶ月前に参加者数や参加区分ごとの割合の情報が必要であったため、当初は160名程度の予測で手配を進めた。しかし、申し込み締切日には最終的に200名に達する申し込みがあり、区分毎割合も判明したため、直前に追加発注をおこなうことになった。そのため、学生会館カフェテリア食堂には直前の変更対応でご負担をおかけしたかもしれない。参加者の階層の予測が難しく、受け入れ人数の上限もあることから、参加費は、例年通りの高めの設定になったが、今後はもう少し参加費を抑えることを検討してもよいかもしれない。

懇親会中や翌日にも、料理も酒もとても良かったという声をいただいた。懇親会開催にあたり、多大なるご協力をいただいた学生会館カフェテリア食堂の店長をはじめ、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

（可児智美：LOC懇親会担当）



（上左）松田博貴大会実行委員長、（上右）大谷 順 熊本大学副学長（研究担当理事）、（下）懇親会会場の様子。

学生優秀発表賞

審査の結果、下記42件の発表が「学生優秀発表賞」に決定しました（エントリー総数142件）。

G-O-17 日比 絵里奈 大型底生有孔虫を用いた知念層の堆積環境指標の提案と古水深復元
G-P-41 波多野 瑞妃 島根県東部中新統古浦層・成相寺層に見られる黒色泥からなるインジェクタイトの特徴と成因
T1-O-13 高橋 慧 沖縄県慶良間諸島「阿嘉島

剪断帯（新称）」にみる沈み込み帯深部プレート境界剪断帯の形成過程と歪分布
T1-O-14 國谷 七海 ドローン磁気探査による蛇紋岩分布の抽出：赤石山地北部・三波川帯の例
T1-O-2 北代 拓人 宮崎県、尾鈴山酸性岩体に産するS-type花崗岩類における下部地殻の部分熔融と組成変化
T1-O-3 高橋 瑞季 鳥取県大山に産する変成花崗岩ゼノリスから示唆される山陰地域の地下岩石構造
T1-O-5 権藤 洗人 東南極セール・ロンダーネ山地ブラットニーパネに産するザクロ石—黒雲母片麻岩中の超高温変成作用を示唆するルチル
T1-P-15 延原 香穂 接触変成作用に伴う超苦鉄質岩類の熱変成反応と流体活動：赤石山地北部・三波川帯の例
T1-P-19 宮田 佳奈 マリアナ海溝南部マリアナ前弧海嶺に産出する2種類の溶け残りかんらん岩の鉱物化学組成と結晶方位フリップピックの特徴
T1-P-6 村山 療 下部地殻変形における地震サイクルと溶質移動の役割：東南極、ナビア岩体での観察から
T2-O-5 福井 堂子 愛媛県芸予諸島伯方島に産するエビ閃長岩：高温熱水流体による花崗岩類の変質と元素の移動・濃集
T2-P-1 垣内 拓馬 屋久島花崗岩に含まれる正長石巨晶の成長過程
T2-P-12 平田 悠馬 番川かんらん岩捕獲岩の構造岩石学的研究
T2-P-13 荒岡 柊二郎 オマーン・オフィオライト南部、新期拡大セグメント地殻セクションの地球化学的特徴とその意義
T2-P-23 濱野 裕大 北部九州、朝倉花崗閃緑岩の南北縦断組成変化と岩体成長過程
T2-P-9 田次 将太 東北日本、秋田駒ヶ岳火山の山体発達史
T4-O-10 佐々木 勇人 脆性-延性遷移領域における変形組織とスロー／ファスト地震の統計性との間の関係：ゲル格子-粘性流体混合系の剪断アナログ実験
T4-O-11 永井 嵩也 固体圧式変形試験機による高封圧条件下における精密応力決定：大理石の変形実験への適用
T4-O-12 鈴木 康平 流通式水熱実験による斑れい岩の熱水変質に伴う元素移動と置換組織の発達
T4-O-15 外山 和也 三波川帯におけるマイクロプーディング構造を用いた応力・歪解析
T4-O-6 戸田 涼斗 Slow-to-Fast地震発生帯の温度条件下での流体圧降下による断層バブルモデルの実験的再現と鉱物脈形成
T4-O-7 八木 寿々歌 南海トラフ地震発生帯における泥質片岩のレオロジー特性に関する実験的研究
T4-P-3 山崎 悠翔 深部プレート境界岩の変形機構とレオロジー
T4-P-6 駒木野 照太 沈み込みプレート境界における歪速度と剪断応力の推定：石英の

変形機構とレオロジー特性からの知見
T4-P-7 窪田 虎太郎 緑泥石-アクチノ閃石片岩におけるアクチノ閃石の粒径に依存した変形機構の遷移
T5-O-7 多久和 風花 海山沈み込み・付加に伴うプレート境界断層の変形：美濃帯舟伏山ユニットの例
T5-P-6 中野 竜 碎屑性ジルコン複合化学分析に基づく根田茂帯網取ユニット形成史と前期古生代テクトニクスの解明
T7-O-11 鬼頭 岳大 上部ジュラ系～下部白亜系鳥巢式石灰岩の形成要因
T7-O-12 Abhishek Kumar Pandey Sedimentological and geochemical characteristics of Mesoproterozoic Chitrakoot Formation, lower Vindhyan Supergroup, central india: Implication on paleoenvironment
T7-O-7 清原 愛 長野県白骨温泉に分布する化石トラバーチンの堆積学的・地球化学的特徴と形成過程の解明
T7-P-10 菊池 凌太 3次元畳み込みニューラルネットワークを用いたCTスキャン画像からの岩相判別モデル
T10-P-2 出口 琢磨 足尾帯南西部に分布する白亜紀花崗岩類のジルコンU-Pb年代
T12-O-10 太田 映 インド洋におけるデカン洪水玄武岩噴出イベント期の海水オスミウム同位体層序
T12-O-18 平井 悠河 川砂ジルコンの微量元素組成に着目した後背地推定法の検討：三河地域の領家花崗岩類を例に
T12-O-7 西山 烈 下部更新統大桑層のアルケノンに記録された日本海沿岸域の表層環境変動
T12-P-11 河端 康佑 豊浦層群西中山層からの豊富なMISSの発見と、新たな研究可能性について
T12-P-6 板倉 義空 カゲロウ幼虫化石から検出された有機物とその意義
T13-O-1 高橋 恒佑 北海道蝦夷層群のチューロニアン/コニアシアン境界における大型化石・炭素同位体比統合層序と高精度国際年代対比
T13-P-20 辻本 大暉 下北半島北東部に露出する中新統・蒲野沢層からの熊野カルデラ由来のテフラの発見
T13-P-21 小坂 日奈子 栃木県茂木地域における前期中新世珪長質火山岩類の地質学・岩石学的特徴
T13-P-25 堀田 大翔 島根県松江市鹿島町の手結のスランプ褶曲とその形成過程
T14-P-4 山中 杜馬 九州における西南日本弧と琉球弧のマグマ発生機構

第23回日本地質学会 ジュニアセッション

優秀賞（1件）：

J-P-4 熊本県立宇土高等学校 科学部地学班

「知らない現象（不知火現象）を科学する6 ついに観測に成功！不知火の正体に迫る～」

奨励賞（4件）：

J-P-3 熊本県立宇土高等学校 科学部地学班 「えっ！？島が浮いてる？浮島現象を科学するⅢ ～視程から解き明かす蜃気楼の謎～」

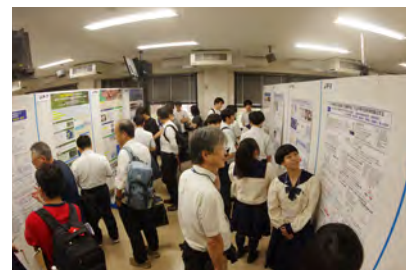
J-P-5 熊本県立宇土高等学校 科学部地学班 「知らない現象（不知火現象）を科学する6 ～不知火はなぜ、八朔の晩にしか見られないのか？～」

J-P-18 中央大学附属高等学校「彩雲と光環の再現実験の検証～光源と雲生成条件の変化～」

J-P-20 東京学芸大学附属高等学校「変圧器を利用した水槽実験による皿状構造の再現と形成過程の考察—地層の固結度と水圧の違いから考える堆積構造の形成条件—」

※参加校（13校26講演、順不同）

- ・熊本市立月出小学校
- ・熊本県立天草高等学校
- ・熊本県立宇土高等学校 科学部地学班
- ・琉球大学 知創推進部 地域連携推進課 企画係「次世代人材育成事務局」琉大SEARCHプログラム
- ・池田学園池田高等学校 科学思考班/SSH地球科学班
- ・愛媛大学附属高等学校
- ・兵庫県立姫路東高等学校
- ・和歌山県立田辺高等学校
- ・名古屋高等学校・名古屋中学校
- ・中央大学附属高等学校
- ・東京学芸大学附属高等学校
- ・市川高等学校
- ・北海道龍谷学園小樽双葉高等学校 科学同好会



学生・若手のための 交流会

若手活動運営委員会では、「地質学に携わる学生・若手の研究活動と交流を活かしたい」との思いから、「学生・若手のための交流会」を企画・運営しています。今年度は、熊本大会の前日である9月13日16時30分より、熊本城近くの城彩苑多目的交流施設にて開催しました。

当日は、学部生5名、修士学生15名、博士学生10名、ポスドク2名、その他（大学教員・企業関係者等）8名の計40名が参加しました。交流会は、参加者全員による自己紹介（希望者はスライド使用可）から始まり、6人程度のグループに分かれてのグルーブトーク、そして最後には自由な形でのフリートークの時間を設け、参加者同士の交流を深める構成で進行了ました。

自己紹介では、参加者の研究紹介や翌日の熊本大会での口頭・ポスター発表の宣伝が多く見られ、笑いや拍手が随所に見られ、会場は終始和やかな雰囲気、参加者間の一体感が感じられました。グルーブトークでは、同じ分野の研究者同士による熱のこもった議論が交わされる一方、異分野の話題に触れた学生からは「新鮮な刺激を受けた」との声もありました。また、学部生・修士学生が博士学生やポスドクに進路相談をする場面も見られ、世代を超えた有意義な交流が実現しました。

交流会終了後には、知り合った参加者同士でそのまま食事に向かう姿も多く見受けられ、大学や研究分野の垣根を越えた広がりのある交流が行われました。

大会終了後に実施したアンケート（回答者15名）では、「交流会の満足度」について、「とても良かった」が60%、「良かった」が40%と、全員から好意的な評価を得ました。特にグルーブトークに関しては、「参加者同士の距離が近く、様々な方と交流できた」との声が多く寄せられました。また、「次回も参加したいか」という質問には、93%が「参加したい」と回答しており、学生・若手同士の交流の場を求める声の高まりが感じられました。

今回の交流会には全国約15校から学生が参加しましたが、今後はさらに多くの大学からの参加を促し、より広がりのある交流会を目指していきたいと考えています。

（世話人：岳孝太郎・神谷奈々・佐々木聡史）



写真：交流会の様子（上：会場の様子 下：グルーブトーク）

ランチョン

ジオパークの活動内容紹介

世話人：吉瀬毅（桜島錦江湾ジオパーク）、郡山鈴夏（糸魚川フォッサマグナミュージアム）、天野一男（日本地質学会ジオパーク支援委員会）

日本地質学会ジオパーク支援委員会は、ジオパーク専門員の活動紹介と関心層との交流を目的として、9月14日にランチョンセッションを開催した。支援委員会では131年大会まで2回「ジオパークで働く」という内容でジオパークに興味を持つ研究者を対象としてランチョンを開催した。3回目となる132年大会では「ジオパークの活動内容紹介」と内容を変更した。冒頭では天野一男委員長より、近年専門員の数が増加し、活動分野も多岐にわたっていることが紹介された。

本セッションでは、豊後大野ジオパークの吉岡氏と糸魚川ユネスコ世界ジオパークの郡山氏による事例紹介が行われた。吉岡氏は産業技術総合研究所・地質調査所にて約30年間、活断層の調査などに従事してきた経験を持ち、その専門的知見が現在のジオパーク活動にも大いに活かされていることを紹介した。質疑応答では、地方の防災分野では、行政職員や地元コンサルタントの多くは地学に関する十分な知識を持たず、地質現象への理解が不十分な現状がある。このような背景のもとで住民の防災意識を高めるには、地質現象の正しい理解が不可欠であり、ジオパークによる教育的な取り組みがその一助となることが共有された。

郡山氏からは、研究活動を通じた文化財との関わりが紹介され、まずはジオパーク地域での研究を進めてほしいという意見があった。質疑応答では、ジオパークが提供する助成金に加え、環境保護系の助成制度についても情報共有がなされた。

参加者らは積極的に議論に参加し、専門員の視点からの活動紹介を通じて、現場の課題や工夫について率直な意見を交わした。普段なかなか表に出ない実務に根ざした声を共有したことで、ジオパーク活動の実態に対する理解が深まり、非常に有意義な時間となった。こうした奇譚のない対話の場は貴重であり、今後も継続的に開催することで、地質学者とジオパーク関係者との相互理解がさらに促進されることを期待する。



法地質学研究会のランチョン

世話人：川村紀子

本年度も学会期間中に法地質学研究会のランチョンを開催した。ランチョンの参加者は合計11人であり、若手研究者からベテラン研究者まで、幅広い年齢層が集まった。このランチョンでは、法地質学の概要や最近の研究のトピックが紹介された。また2025年5月にローマで行われた国際地質科学連合（International Union of Geological Sciences：IUGS）のInitiative on Forensic Geologyの研究集会に参加した委員から、法地質学の研究テーマの動向についての報告が行われた。

本研究委員のメンバーはJpGU-AGU joint meeting 2026において法地質学のセッションの立ち上げを検討しており、講演の内容が議論された。セッションを盛り上げるために、幅広い研究内容を受け入れる予定であることが決定した。またこのセッションへの要旨の投稿の呼びかけが行われた。

（川村紀子）

構造地質部会定例会・若手の発表会

世話人：濱田洋平（JAMSTEC）・志村侑亮（産総研）

構造地質部会では、大会一日目（9月14日）、二日目（9月15日）のランチョンとして、それぞれ部会定例会と若手の発表会を開催した。

定例会では、部会活動に関する報告と意見交換を行った。事務局メンバー（部会委員）の紹介と交代や2024年度会計、各賞推薦などの活動報告と活動予定の共有がされた。また、JpGUのセッション提案承認では事前にコンビーナより申し入れのあった2セッション「変形岩・変成岩とテクトニクス」と「日本列島および東アジアの地質と構造発達史」について、セッションスコープが紹介された（地質学会後のオンライン決議によって「活断層と古地震」セッションとともに後日部会承認済）。その他、来年度以降の部会定例会に向けた委任状の提出方法や構造地質部会が後援するイベントについての意見交換が行われた。

加えて、JpGUに構造地質部会・岩石部会から提案されている「変形岩・変成岩とテクトニクス」について、部会選出のコンビーナ任期についての確認と、昨年度に実施されたアンケートの結果がセッションコンビーナから紹介された。

今大会の若手の研究発表会では二名が講演した。東京大学博士後期課程3年の小山雪之丞氏が「石英の動的再結晶組織を用いた変形温度・差応力推定：三波川沈み込み型変成帯の例」というタイトルで、四国中央部に位置する三波川沈み込み型変成帯を例に、石英の動的再結晶組織を用いた変形温度や差応力の推定結果とそこから明らかにされた岩体の変

形様式について紹介した。高知大学博士2年の内田泰蔵氏は「断層岩の古地磁気・岩石磁気学的研究：走査型SQUID磁気イメージング装置を用いた最新手法」というタイトルで、磁場イメージと顕微鏡観察・元素分析の比較に基づき、断層運動に伴う断層物質の熱的影響に関する研究結果を紹介した。構造地質部会員をはじめとして多くの学会参加者がランチョン会場に訪れ、両氏の発表に対して非常に活発な議論が行われた。構造地質部会では、学生・若手研究者の発表機会の提供と部会内外での研究交流を目的として、今後もこの若手の発表会を継続していく予定である。

火山部会

世話人：石毛康介

文化地質学

世話人：森野善広・大友幸子・坂本昌弥・猪股雅美

文化地質学ランチョンは、大会2日目（9月15日）に開催された。3月の総会で決定した人事や行事委員からの報告があり、今後の活動についても協議をおこなった。出席者は26名であった。

協議事項として令和8年総会・研究発表会の企画と日程があり、大谷大学で令和8年3月7日（土）・8日（日）に実施することが決定した。また、論文賞については選考委員で集まり協議ののち、受賞者を決定する旨が伝えられた。その他はJpGU2026の参加について、パブリックセッションでの参加希望が上がったことから、今年も同様の形態での参加を検討した。トピックの候補がいくつか挙げられたため、行事委員会でそれらを決めることが述べられた。編集委員会の今後の方針については、引き続き協議することとなった。

報告・協議の後に、参加者の自己紹介および近況報告がおこなわれた。地域に住む人々の宗教・民俗学・地政学などと絡めて、文化と地質の関係を研究している、という参加者が多くみられた。ランチョンを通じて、多様な分野に地質の繋がりがあることがわかった。



岩石部会

世話人：宇野正起

岩石部会ランチョンは大会2日目に対面で開催され、出席者は24名であった。行事委員の宇野正起会員から活動報告（岩石部会からのトピックセッション、JpGU共催セッション、地質学会各賞候補の推薦・受賞）がなされた。庶務委員の大柳良介会員からは、岩石部会のSNS活動に関する報告と、部会員による新着論文情報の提供依頼があった。部会長の中野伸彦会員からは、来年度の各賞推薦に向けた積極的な情報提供の呼びかけがなされた。

任期満了に伴い岩石部会の行事委員を宇野正起会員から頼瀬佑衣会員へ交代することが提案・了承された。

JpGU-AGU2026の共催セッションとして「変形岩・変成岩とテクトニクス」セッションが山岡健会員・永治方敬会員より提案され、了承された。同セッションのコンピーナの任期を原則3年・最大5年とする案および、2026年について発表言語を英語とする案がそれぞれ提案・了承された。また、「Oceanic and Continental Subduction」セッションがハフィーズ・レーマン会員より提案され、承認された。

IMA (International Mineralogical Association) 2026 (南京, 中国) やAOGS (Asia Oceania Geosciences Society) 2026 (福岡) について、辻森樹会員からセッション提案への積極的な応募が呼びかけられた。

支部長連絡会議

世話人：杉田律子（副会長）

大会2日目にランチョンを行い、以下の事項について伝達および意見交換を行った。

1. 今後の学術大会開催にあたっては物価高騰により必要経費が増加していることから会場の選定や補助金の活用など十分に検討していただきたいこと
2. 各支部でもシニア会員の活躍の場について協力していただきたいこと
3. 事務連絡

ジェンダー・ダイバーシティ委員会

世話人：天野敦子

ジェンダー・ダイバーシティ委員会のランチョンは9月15日に開催され、委員5名と担当理事1名に加えて、委員会外から1名の参加があった。総務委員会から提案された休会案の諮問など下記4つの話題について話し合った。

- 1) 休会案に対する意見

・育児、介護、病気だけでなく休会の理由は様々あるため、休会の理由を特定せず、また休会届に理由を明記するのみとして、証明書の提出は削除する。
・月割りで支払う意見もあるが、年会費を免

除とするほうが、事務負担が少なく、休会制度を悪用するケースを防げるのではないかと、休会の開始時期や期間でどのように免除されるのかを例をあげて示す。

- ・シンプルな制度として早期開始を目指し、数年後に見直し、改定する。
 - ・理事が休業する場合なども想定して、制度を準備しておいたほうがよい。
- 2) ダイバーシティ認定ロゴの運用
- ・ESCシールよりも若手活動運営委員会が配布している求職シールのほうが、理由が明確で、声を掛けられやすい。
 - ・プログラムにESCロゴがあることで、若手と判断しやすい。
 - ・ロゴの運用を続けるのであれば、申請時のページにその意図の説明を加えて、ロゴの活用を促すことが必要ではないか。
 - ・ロゴの運用をやめるという選択も視野に入れて、開始5年目となる2026年に継続を決める。

- 3) ワークショップの開催

・現段階でワークショップ開催案がないのであれば、年度計画などに入れる必要はない。ただし、今後、問題提起の場として開催を検討できるように、学会員の意見等を集約する。

・2021年に開催された座談交流会での若手からの意見を基に、学生会員の会費支払いなどの改正が行われたので、ワークショップ開催の効果は大きい。

- 4) 理事の戸籍名表記

・法務局へ提出する都合で、理事会議事録では理事の名前が戸籍名を併記して示されている。しかし会員へ公開する資料には、個人情報に関わるため記載してもらいたくない旨の意見がある。また、戸籍名が変わるのは女性が多いため、公開資料での戸籍名併記は女性理事の比率を上げることへのマイナス要因となる。

・ランチョンの後、事務局が法務局に、戸籍謄本を加えて理事名簿を提出すれば、議事録に戸籍名を表記する必要がないことを確認した。事務局と総務委員会が今後の手続き等について検討する予定。

JABEE校情報交換打ち合わせ

世話人：竹内真司、坂口有人

堆積地質部会

世話人：足立奈津子

堆積地質部会ランチョンが、大会3日目（9月16日）の部会関連セッションに続いて開催され、部会活動に関する報告と情報交換をおこなった。出席者は27名であった。最初に部会長の太田亨氏（早稲田大）から、本年度の熊本大会での部会関連セッションの総括と次年度に向けた方向性について話があった。その後、部会幹事から各賞選考、地質学雑誌の編集状況、熊本大会のプログラム編成に関する報告、関連セッション報告、関連学会・シ

ンポジウム (連合大会、炭酸塩コロキウム、日本堆積学会、有機地球化学会など) の報告・案内があった。

本年度の部会関連講演数についてセッション世話人から報告があった。T7「堆積地質学の最新研究」では、20件の口頭発表、21件のポスター発表があった。そのうち招待講演は2件「海底のイベント堆積物を用いた地震履歴研究の現状と今後のチャレンジ：日本周辺海域の研究から」、『九州地域の天然水素ポテンシャル評価について』であった。来年度はさらに口頭発表件数を増やしていきたいと抱負が述べられた。ジェネラルセッション「堆積地質」には4件のポスター発表があり、T7セッションのポスター発表と同日に実施された。最後に、来年度のトピックセッションの提案など次回大会に向けた意見交換があった。

地域地質部会・層序部会 合同ランチョン

世話人：佐藤大介

地域地質部会・層序部会合同ランチョンを大会3日目 (9月16日) に開催し、以下について話し合った。出席者は14名であった。

1. 人 事

今年度は人事の変更なし。

2. 部会に関連するセッションについて

「T13 地域地質・層序学：経過と集大成」は口頭18件、ポスター 32件であった。発表件数はジェネラルセッション (地域地質・層序・年代) の発表件数が増加したためか昨年と比べてやや減少した。来年度も継続して、幅広い内容のテーマ設定でトピックセッション化を予定。

「T9 大地と人間活動を楽しみながら学ぶジオパーク」は口頭7件、ポスター 3件であった。例年ジオパーク関連の会議が9月に開催されるため (今年は世界ジオパーク国際会議@チリ)、一部関係者の不参加はあるものの、セッションは例年同様の盛り上がり具合で、発表件数も昨年と同数であった。継続してトピックセッション化しており、来年度もトピックセッション化を予定。

ジェネラルセッションの「地域地質・層序・年代」では口頭6件 (うち1件取消)、ポスター 24件で、昨年に比べて大幅に発表件数が増加した。

3. 各賞選考

部会から推薦したうち、日本地質学会論文賞1件、研究奨励賞1件が選出された。今後も継続して推薦を行うが、部会員から推薦がない。部会幹部・部会員から広く候補を集約するとともに、推薦文は候補者関係者に書いていただくなど検討がなされた。

4. 連合大会 (JpGU) のセッション開催・承認について

例年、JpGUの共催セッションとして地域地質部会と構造地質部会の共催で開催している「日本列島および東アジアの地質と構造発

達史」セッションが羽地俊樹会員より提案され、JpGUに提案することで承認された。

そのほか話題提供として、斎藤 眞部会長より10万分の1徳島県地質図 (村田明広著、徳島大学環境防災研究センター 2025発行) が紹介された。

海洋地質部会

世話人：小原泰彦・三澤文慶・松崎賢史

海洋地質部会ランチョンは、過去1年間の海洋地質関連の研究機関における研究動向と今後の調査予定等の報告を行い、各種情報の共有を行うことを目的に開催された。各機関から計26名の出席があった。

・東京大学大気海洋研究所 (松崎賢史会員)：新青丸・よこすか共同利用航海と、2026年3月10日・11日に開催予定の「海と地球のシンポジウム2025」の発表募集について報告された。

・高知大学海洋コア国際研究所 (池原実会員)：高知大学学術コアリポジトリとReCORDについて報告があった。また、「国際海洋科学掘削スクールを核とした温暖気候変動研究交流拠点 (WarmCCR)」について紹介があった。

・東海大学海洋学部 (坂本泉会員)：駿河湾総合研究プロジェクトについて報告された。昨年導入された「ROV TOKAI 2500」(2500m級ROV) の海上試験について報告された。

・海洋研究開発機構 (中村恭之会員)：「みらい」の退役および「みらいII」の建造および「AUVうらしま8000」について報告された。

・産業技術総合研究所 (石野沙季会員)：海域地質図作成に係る長崎西方沖調査 (2023-2025年度) について「地質調査研究報告」で速報が公表されたこと、また、宮古曽根周辺海域で調査中 (2025-2027年度) であることが報告された。

・海上保安庁海洋情報部 (小原泰彦会員)：現在3000トン級の大規模測量船2隻が建造中であること、また任期付き研究官の募集を行ったことが報告された。

・J-DESC (斎藤実篤会員)：JAMSTECでは7月1日付けで改組があり、MarE3も改組となり、地球深部探査船運用部が新設されたことが報告された。

上記の海洋地質関連の研究機関による報告の後、次の報告と審議がなされた。

・TN438航海報告 (奥村知世会員・高知大学海洋コア国際研究所)：2024年11月-12月に南部マリーナ海域で実施されたR/V Thomas G. ThompsonによるTN438航海の報告がなされた。同航海では、ROV Jason/Medeaによる潜航調査がなされ、その使用感について「しんかい6500」による調査と比較した検討が報告された。

・JpGU 海洋底地球科学フォーカス・グループについて：海洋地質部会は同フォーカス

グループのコアメンバーに入ることとなったことが報告された。コンタクトパーソンは、海洋地質部会長となる。

・世話人の交代について：現在の体制 (部会長：海上保安庁海洋情報部・小原泰彦会員、世話人：産業技術総合研究所・三澤文慶会員および東京大学大気海洋研究所・松崎賢史会員) から、新体制として、部会長：産業技術総合研究所・三澤文慶会員、世話人：東京大学大気海洋研究所・松崎賢史会員および東海大学・横山由香会員とすることが審議され了解された。

夜間小集会

地質年代用語を考える

世話人：鈴木寿志

2025年9月15日 (月) の午後6時から7時半まで、熊本大学黒髪キャンパスの第1会場にて夜間小集会「地質年代用語を考える」が開催された。参加者はそれほど多くなかったが、若手の学部生・大学院生からベテラン研究者まで幅広い年代層の方々の参加があった。世話人の鈴木が現在の地質年代用語に関する課題について説明し、その後参加者間で活発に意見が交わされた。とくに、国際的に第三紀が使われなくなっているにもかかわらず「古第三紀」「新第三紀」が使われている問題、「世」の地質年代区分階層に「前期」「後期」と「期」が使われている点、「前期中新世後期」というような理解できない語順の問題、「期・階」に相当する用語が単に英語発音のカタカナ表記になっており日本語化が望ましいこと、などが話し合われた。「第三紀」について工学分野では「第三紀地すべり」のような用例があり、定着して用いられていることが指摘された。日本の新生代層の記述では、紀の階層を言わずに、単に中新世や鮮新世のように「世」を中心に述べられる傾向があるという。また「始新世の沖積層」といった用例もあり、この場合の沖積層は地質年代を指すのではなく、当時の堆積環境として沖積層を用いている。

最近の日本の層序学的研究では、地域階がほとんど扱われなくなり、国際標準階や標準化石帯に直接対比して論じられる場合が多くなっている。しかし、国際境界模式層序・位置 (GSSP) が設定される際も、それぞれの地域層序がきちんと研究された上で、国際会議で提案されているわけで、その意味で日本における地域層序も改めて見直し、今日的な意味で地域階を再定義する努力も必要であろう。日本の層序と地質年代用語の課題について、引き続き参加者間で連携を深め、意見交換を進めていきたい。

(鈴木寿志)

J-DESC夜間小集会：IODP³始動！

世話人：神谷奈々、森下知見、濱田洋平、池原 実

いよいよ今年から、新たなプログラムとして国際海洋科学掘削計画（IODP³）がスタートした。海洋科学掘削に関する情報交換を主な目的として、日本地球掘削科学コンソーシアム（J-DESC）関係者の主導により、9月15日に夜間小集会を開催した。冒頭には、IODP³の発足時の詳細と今後の展開について、斎藤実篤氏（J-DESC事務局）から紹介があり、これまでのIODPとの違いや今後の展望について情報共有がなされた。国際ワークショップの紹介をはじめとする国際陸上科学掘削計画（ICDP）の近況についても藤原治氏（産総研）からご報告いただいた。その後は、「2025年掘削関連プロジェクトの紹介&感想・意気込み」と題し、2025年に実施済みもしくは実施予定のプロジェクト紹介を行った。海洋掘削に関しては、NSFとのジョイント航海となったExp. 501（New England Shelf Hydrogeology）について桑野太輔氏（京都大学）よりご報告いただいた。本航海は、掘削船ではなくリグを設置して行われたプロジェクトであり、これまでのIODP航海の様子とは違った一面が垣間見える興味深い報告であった。山口飛鳥氏（東京大学）からは、10月下旬からのちきゅうでの航海を予定しているExp. 502（Impact of Petit-Spot Magmatism on Subduction Zone Seismicity and Global Geochemical Cycles）についてプロジェクトの紹介と意気込みをお話いただいた。さらに、池原研氏（産総研）からは、11月にちきゅうによる掘削を予定しているExp. 503（Hadal Trench Tsunamigenic Slip History）についてプロジェクトの内容と意気込みを情熱的にご紹介いただいた。昨年実施のIODP Exp. 405に引き続き、日本海溝をターゲットにした2つの航海が予定されており、今後様々な側面から日本海溝についての理解が深まってくることが予想される紹介であった。後半では、リボトリコアを活用したプロジェクトの紹介として、関有沙氏（深田地質研究所）より、今後実施予定のSPARCSプロジェクト（SIGNALS – Stratigraphic Integration of North Atlantic Legacy Sites）のご紹介をいただいたほか、吉田一貴氏（高エネルギー加速器研究機構）からは、今年8月実施のReCoRDプロジェクト（Understanding magnetic architecture of oceanic lithosphere: Insights from Atlantis Bank, Southwest Indian Ridge）についてご報告いただいた。リボトリコアを活用したプロジェクトにおいても、様々な工夫を凝らした研究が実施・計画されており、大変興味深い内容であった。最後に、「どのようにして日本からプロジェクト提案をしていくか？」をテーマに総合討論が行われ、プロジェクト提案に向けた今後の課題などが議

論された。集会には60名以上が参加し、集会終了後には熊本市内の居酒屋に場所を移して、年齢や所属、分野を超えて、各々に掘削科学について熱い議論が続けられた。



J-DESC夜間小集会の様子

南極地質研究委員会

世話人：外田智千

集会の出席者は29名であった。最初に、本夜間小集会は委員会メンバーだけでなく学生・院生を含めて南極の基盤地質研究に興味のある方は誰でも参加可能との説明があった。本委員会の現委員の任期（2022年9月～2025年9月）が終了し、次の任期（2025年9月～2028年9月）となるに伴う新たな委員の紹介、また委員長には大和田正明教授（山口大）に代わって馬場壮太郎教授（琉球大）が就任することが承認された。

引き続いて、以下の報告があった。

1. 南極観測の将来計画として、地球物理関係で検討している内容の紹介があった。
2. 南極観測における基盤地質関連計画の今後の見通しについて、第X期6カ年計画（2022-2028年、JARE 64-69）の期間中、すでに採択されている課題として2026-2027年（第68次南極地域観測隊（JARE 68））に実施が予定されていた地質調査計画が南極観測隊全体の設営面の都合・制約により、1年延期の2027-2028年（JARE 69）に変更となることの説明が外田智千（極地研）よりあった。それは別に今年3月に募集のあった萌芽研究観測で地質関連のプロジェクト（「昭和基地周辺の天然放射性核種による岩盤内部の熱生成の高精度・高信頼検証」）が採択となり、2026-2027年（JARE 68）と2027-2028年（JARE 69）の2カ年で実施予定との紹介があった。その先の将来計画として、次の第XI期6カ年計画（2028年～、JARE 70以降）について、今後まず重点研究観測の設定から議論がはじまるほか、今年12月の極域科学シンポジウムでそのキックオフのセッションが予定されていることの説明があった。
3. 毎年開催されている極域科学シンポジウムの今年度の開催予定（12月25日、国立極地研究所）、極域に関わる国立極地研究所の公募型共同研究（特別共同研究（公募期間9月1日～10月31日）、一般共同研究（公募期間10月1日～12月10日））についての情報提供があった。

（外田智千）

環境地質部会

世話人：田村嘉之

炭酸塩堆積学に関する懇談会

世話人：白石史人・足立奈津子・山田 努

集会の出席者は29名であった。最初に、本夜間小集会は委員会メンバーだけでなく学生・院生を含めて南極の基盤地質研究に興味のある方は誰でも参加可能との説明があった。本委員会の現委員の任期（2022年9月～2025年9月）が終了し、次の任期（2025年9月～2028年9月）となるに伴う新たな委員の紹介、また委員長には大和田正明教授（山口大）に代わって馬場壮太郎教授（琉球大）が就任することが承認された。

博物館と生涯教育委員会

世話人：先山 徹、笠間友博、太田泰弘

生涯教育委員会を中心に、博物館や生涯教育に関わる会員の情報交換の場として夜間小集会を行った。参加者は会場11名、オンライン3名の計14名であった。小集会では最初に矢部淳副委員長（国立科学博物館）から今年度の活動報告として、地質学会news誌の連載「博物館・ジオパークで地球をまなぼう！」の状況、地質の日オンライン講演会、街中ジオ散歩についての説明があったのち、2件の博物館に関する講演がなされた。

講演の1件目は2024年に御所浦白亜紀資料館からリニューアルオープンした天草市立御所浦恐竜の島博物館について、「天草市立御所浦恐竜の島博物館の開館について」と題して黒須弘美氏（天草恐竜の島博物館）により展示を中心に紹介いただいた。また2件目は2021年に開館したベネックス恐竜博物館（長崎恐竜博物館）について、中谷大輔氏（長崎恐竜博物館）により「恐竜博物館の建設と機運醸成の試み」と題して、博物館設立の機運を高めるための活動を中心に詳しくお話しいただいた。今回講演いただいた2件とも恐竜をメインにした新しい博物館であり、九州の博物館界の熱量を感じさせる講演であった。



学生のための地質系業界説明会

日時：2025年9月15日（月）10:00-17:00

場所：全学教育棟2階B201, B202, D201, D202, D203, E204

※詳細については、次号ニュース誌で報告記事を掲載予定です

市民講演会 「熊本から始める最新恐竜学」

日時：9月15日（月・祝）14:00~16:00

場所：熊本城ホール3F会議室A1

参加者：約60名

熊本大会の市民講演会は恐竜をテーマとした。熊本県下で1979年に国内初となる肉食恐竜の化石が発見され以降、熊本県は恐竜の一大産地となっている。今回は、熊本をはじめとした九州の恐竜と、それらに伴って産出する脊椎動物化石を中心とした講演である。

九州と白亜紀と恐竜学（国立科学博物館 真鍋 真氏）

日本からこれまで報告されている恐竜産地についての紹介のあと、九州で産出する恐竜化石について、九州には恐竜が絶滅したK/Pg境界後の古第三紀の脊椎動物化石も発見されていることの説明が行われた。世界の多様性が、白亜紀後期にはすでに減少傾向にあったこと、恐竜の分散経路の解明には、南米やアフリカでの調査が重要であること等が講演された。

北部九州の恐竜研究のいま（北九州市立自然史・歴史博物館 大橋智之氏）

九州の関門層群で発見された白亜紀前期の獣脚類ワキノサトリウウの説明の後、近年発見された竜脚類の頸椎の化石についての詳しい解説がなされた。その後、九州の古第三紀から発見され、世界的にも注目されている鳥類化石「プロトプテルム類」についての研究が紹介された。

恐竜の島・御所浦（天草市御所浦恐竜の島博物館 黒須弘美氏）

昨年度リニューアルされた天草市御所浦恐竜の島博物館の見どころについての紹介の後、御所浦を中心に天草周辺で発見された白亜紀後期の恐竜化石についての説明がおこなわれた。特に国内で初めて発見され、生え変わりの歯までもが歯槽に保存された「ティラノサウルス類」の下顎化石や、大型の魚類化石「アマクサイクチス・ゴショウラエンシス」の解説がなされた。

御船層群の恐竜たち（御船町恐竜博物館 池上直樹氏）

九州の恐竜研究の発祥の地として有名な御船町から発見された白亜紀後期の様々な脊椎動物化石についての説明がなされた。特に脊椎動物化石の密集層「ボーン・ベッド」発見当時の貴重な写真や露頭の解説、「テリジノサウルス類」等の恐竜化石や、今年記載され

た翼竜化石「ニッポノプテルス・ミフネンシス」の解説がなされた。

同日熊本城ホールの1Fで開催されていた「地質情報展」のミニシアターで、市民講演会のライブ中継もおこない、講演の様子が映し出された。今回の講演会では、産業総合技術研究所の方々に、ライブ中継をはじめ、地質情報展でのポスターの掲示等、数多くの便宜を図って戴いた。

（田中源吾：LOC市民講演会担当）

地質情報展2025くまもと —火の国・水の国！大地のふしぎ—

「地質情報展2025くまもと」が、熊本城ホール（熊本県熊本市）にて2025年9月13日（土）～15日（月・祝）の期間で開催された。「地質情報展」は、これまでに蓄積されてきた地質情報を小中高生や大学生、一般市民に普及・広報することを目的としたイベントで、開催地域周辺の地質や最新の地質学の成果、地震・津波・地盤災害等のしくみをわかりやすく体験的に展示・解説する。産業技術総合研究所（産総研）地質調査総合センター（GSJ）は一般社団法人日本地質学会と協力して、同学会の学術大会に合わせて全国各地で本イベントを実施してきた。1997年（産総研前身の通商産業省工業技術院地質調査所の時代）から始まり、今回で29回目となる。熊本県での開催は初めてである。九州地方での開催ということで、GSJと日本地質学会に加えて、産総研九州センターが主催となった。共催を阿蘇ジオパーク推進協議会に、後援を熊本県、熊本市、熊本市教育委員会、日本ジオパークネットワーク、九州地質調査業協会、日本応用地質学会九州支部及び熊本日日新聞社に賜った。会場は熊本城ホール1階の展示ホールAであり、それに直結したホワイエに受付を設置した。今回の地質情報展では、8つの体験・実験コーナーと57件の展示・解説コーナーを出展した。そのうち、17件は地元の連携機関からの展示であった。展示内容は主に熊本及びその周辺に係る。地質、火山、活断層、地下水、地熱、鉱物・燃料資源、地球化学図、土壌評価図、液状化等防災、県の石、熊本城の築石に関する展示パネル、床貼り地質図及び体験コーナーであった。日本地質学会からは、第16回惑星地球フォトコンテスト入選作品が展覧された。

初日の9/13（土）お昼に開会式を行い、GSJの中尾信典総合センター長の開会の挨拶に続き、九州センターの植村聖所長、日本地質学会の山路敦会長からお言葉をいただいた。同日及び翌日それぞれの午後に、同展示ホールA内にてGSJミニ講演会が開催され、以下4名（うち3名がGSJ研究者）による講演が行われた。①嘉村哲也氏（熊本城調査研究センター）「熊本城の築石や周辺地形」、②太田耕輔氏（活断層・火山研究部門）「熊本地震」、③星住英夫氏（地質情報研究部門）「熊本の

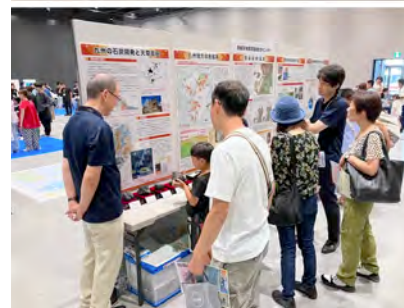
火山」、④井川怜欧氏（地図資源研究部門）「熊本の地下水」。当日は多くの方に参加頂き、講演後には市民の方からの質問が相次ぎ、活発な質疑応答が行われた。15日午後には、初試みとして、熊本城ホール3階大会議室で開催された日本地質学会の市民講演会を上記のミニ講演会場でライブ中継した。常時20名近い方が聴講していた。

本情報展は3日間（実質2日半）の開催で、1366名の来場者があり大盛況であった。来場者アンケート（回答401件）の結果によれば、来場者の大半は小学生と一般であり、熊本市内または熊本県内からの来場者が大部分を占めた。特徴的なのは、産総研以外のWEBページやSNSで51件、その他56件と、事務局が直接宣伝したもの（ポスターやチラシ等）以外からの告知を見て来場された方が多かったことである。特に関心を持った体験は、鳴り砂、石割り体験、化石レプリカづくり、火山噴火実験と続いた。また全体的なテーマに関する質問では、床張り地質図、火山、熊本の地質に関心が高かった。自由記述欄には211件のコメントを頂き、いずれも感謝や肯定的な感想であり、高い満足度が窺えた。

15日午前には、熊本県の代表的キャラクターである「くまモン」の登場もあり、大いに会場を盛り上げていただいた。本イベント開催にあたっては、多くの方々に多大なるご尽力を賜った。学生アルバイトとして当日の運営にご協力いただいた熊本大学の学生21名の皆様へは、深く感謝申し上げる。なお、今回の展示で使用した展示パネルは、GSJのWEBサイト「地質情報展ポスターアーカイブサイト」にて閲覧可能である。

<https://www.gsj.jp/event/johoten/archives/index.html>

（清水 徹，持丸華子，利光誠一：産業技術総合研究所）



写真上から、開会式の様子、パネル展示の様子



Aコース：(左) Stop 1の火砕流堆積物。トンネルの天井部は阿蘇4火砕流堆積物。(右) Stop 4 中岳第1火口。手前右の2つの円い凹みは噴石落下の痕跡。

巡 検

【総括】

日本地質学会第132年学術大会（2025年熊本大会）では、熊本県内をはじめとし、隣県の福岡県、大分県、宮崎県、長崎県にわたる地質学的にバリエーションに富んだ9コースを企画した。残念ながら、「御船層群と御船町恐竜博物館（I）」は最少催行人数を満たさず、中止となった。催行された8コースのうち、プレ巡検は3コース（うち1コースは1泊2日）、ポスト巡検は5コース（うち1コースは1泊2日）である。案内者のご尽力のもと、熊本県の地質としては、「阿蘇火山：カルデラ形成噴火と後カルデラ活動（A）」、「九州中部の黒瀬川構造帯に見られるシルル紀から石炭紀の化石群（D）」、「天草諸島や宇土半島に分布する上部白亜系姫浦層群の堆積環境（E）」、「阿蘇火山と神話から紐解くカルデラの生活－阿蘇ジオパークのサイト巡り－（アウトリーチ巡検）（G）」、「2016年熊本地震の痕跡と布田川断層（H）」の5コース、隣県からは、「北部九州深成岩巡検（B）」、「長崎変成岩巡検（C）」、「九州東部のジュラ紀付加体巡検（F）」の3コースを実施していただいた。このうち、Aコースの案内者（熊本大学の宮縁育夫博士）、Hコースの案内者（熊本大学の鳥井真之博士、東北大学の遠田晋次博士）は地質学会非会員であるが快く引き受けていただいた。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

巡検の企画に際しては、33年ぶりの熊本開催であることから熊本の地質を中心に2023年夏から選定を始め、阿蘇火山に関連する2コース（宮縁博士・星住会員、池辺会員・松田会員）、黒瀬川構造帯に見られるシルル系から石炭系（田中会員）、天草諸島や宇土半島に分布する上部白亜系（成瀬会員・小松会員）、2016年熊本地震の痕跡と布田川断層（鳥井博士・遠田博士・奥野会員）については、早い段階で案内者にご快諾いただき、おおまかなルートや目的が決定した。また、九州の魅力的な地質を巡検いただくことを目的

とした、北部九州深成岩（江島会員）、長崎変成岩（西山会員・森会員・重野会員）、九州東部のジュラ紀付加体（尾上会員・武藤会員・富松会員）についても、早々に案内者にご快諾いただき、ルートや目的が決定された。また、催行には至らなかったが、池上会員による「御船層群と御船町恐竜博物館（I）」に関しても魅力的な巡検地や目的の設定をいただいた。深く感謝申し上げるとともに、宣伝などが十分でなく、催行に至らなかったことは不徳の致すところである。2024年9月には実施予定の巡検コース概要と案内者が決まり、巡検案内書編集委員長（尾上会員）より執筆依頼を行い、巡検案内書編集委員によって査読・編集が行われた。7コースは巡検実施段階までに受理され、大会サイトにもPDFがアップロードされ公開されたが、1コースに関しては実施までに受理に至らず、暫定的な資料としてプリントアウトされたものが参加者に配布された。現在も受理・公開に向けた努力が継続されており、編集委員にはご苦勞をおかけしている。

巡検準備にあたっては、1年前より旅行会社（日本旅行）にバスや宿の見積もりや手配を依頼し、案内者・巡検担当・事務局間で各コースの行程をもとにバスのタイプや参加費を調整・決定した。巡検開催の1か月前である2025年8月に生じた豪雨災害により、巡検地である氷川地域（D）、天草地方（E）、阿蘇地方（H）では甚大な被害が発生し、当初の巡検ルートから大きな変更を余儀なくされた。具体的には、案内者に現地を確認、変更ルート案を作成いただき、執行理事会にて承認をいただいた。ルート変更にご対応いただいた案内者の方々には深く御礼申し上げます。プレ巡検ならびにポスト巡検とも完了することができ、案内・準備にあたっていただいた案内者の皆様、実施準備に当たって各種の調整・連絡をいただいた学会事務局・日本旅行の担当者、巡検案内書の査読・編集に尽力いただいた尾上編集委員長をはじめとする編集委員会の皆様、並びに査読者の皆様に対して厚くお礼申し上げます。

（湯口貴史：LOC巡検担当）

Aコース 阿蘇火山の地質：カルデラ形成噴火と後カルデラ活動

9月17日実施

案内者：宮縁育夫・星住英夫

参加者：永山和久、山路 敦、安邊啓明、梅田浩司、小荒井 衛、佐藤勇輝、柴田翔平、谷元瞭太、羽地俊樹、福田惇一、星 博幸、道林克禎、荒岡柊二郎、井上 創、小坂日奈子、外山和也、中井建琉、中屋敷実春、原田藍生、檜垣悠斗、平田悠馬、古庄航輝、宮田佳奈、高木幸市、甲野藤ゆうな

【案内者の報告】

本巡検では、阿蘇火山の地形や噴出物の観察を通して、火山活動の理解を深めることを目的としている。阿蘇火山は、九州中央部の火山フロント上に位置する活火山であり、現在もたびたび噴火する中岳のほか、玄武岩質から流紋岩質にわたるさまざまな岩質の火山体の集合体（中央火口丘群）である。また阿蘇火山は日本最大級のカルデラを有し、27万年前から9万年前の間に4回の巨大火砕流噴火を発生させている。このうち最後の阿蘇4噴火は、少なくとも第四紀で最大級の巨大火砕流噴火である。さらに、それらの巨大火砕流噴火間や後カルデラ中央火口丘群の噴火活動では、大量の降下テフラをカルデラ内やカルデラ東方に飛散させている。

以上のように阿蘇火山噴出物は多様であり、また分布範囲も広大である。本巡検では日帰りという時間的制約を考慮し、阿蘇4火砕流堆積物とその直前の阿蘇4/3降下テフラ群、噴火活動を続ける中岳火口の観察に絞らざるを得なかった。当初は中央火口丘群の米塚および上米塚の観察を実施する予定であったが、各地点での観察と討論を優先し、残念ながら車窓からの観察にとどめることとなった。

参加者と案内者は、朝8時半に集合場所である熊本大学を出発し、中型バスにて阿蘇カルデラを横断してカルデラ東方の観察地点を目指した。途中、車中から観察できるカルデラ壁や中央火口丘群の地質を案内者が解説す

るとともに、参加者は自己紹介を行った。Stop 1（竹田市荻町野鹿）では、阿蘇4火砕流堆積物とその下位の阿蘇4/3降下テフラ群を観察した。この露頭は、阿蘇4/3降下テフラの軽石と火山灰の互層が美しく参加者から歓声があがった。Stop 2は、阿蘇4A火砕流堆積物と阿蘇4B火砕流堆積物が重なった大露頭であったが、残念ながら露頭面は夏草に覆われており部分的な観察にとどまった。Stop 3は、最近約5万年間の後カルデラ期の主要テフラを観察できる断面であったが、Stop 2と同様に表面に植生が繁茂している状況であった。それでも約3万年前に噴出した草千里ヶ浜軽石とその上位に挟む広域テフラである始良Tn火山灰は観察することができて、阿蘇カルデラ周辺に分布する黒ボク土層の生成と人間活動の関わりなどの問題を活発に議論することができた。

その後、私たちは阿蘇カルデラ内へ戻って中央火口丘群を登り、中岳火口（Stop 4）へ向かった。巡検当日は阿蘇山の噴火警戒レベルは1で、幸いにもガス規制がなかったため、火口見学をすることができた。火口展望所からは1933年2月に噴出した丸沼八と呼ばれる噴石のほか、最近の水蒸気噴火で放出された噴石も遠望するとともに第1火口内の湯だまりもよく観察することができた。さらに、第4火口壁を構成するアグルチネートを見ながら、溶岩との産状の違いなど議論した。この日は外国人観光客も多く、私たちは台湾からの旅行者に集合写真を撮影してもらい、いい思い出となった。

中岳火口見学後は、中央火口丘群斜面を下り、カルデラ西端付近の2016年熊本地震による被害状況などを車窓から見ながら、バスは肥後大津駅と熊本空港へ向かい、最後はほぼ時間通りに出発地点である熊本大学に到着した。予報に反していい天気にも恵まれて、本巡検は無事終了となった。

本巡検を実施するにあたっては、見学地点の土地所有者の方々にご理解をいただくとともに、中岳火口見学では阿蘇火山防災会議協議会にご配慮をいただいた。最後に、本巡検には多くの方々にご参加いただき、円滑な進行にご協力いただくとともに、たくさんの方々のことを議論していただき、案内者としてもよい刺激が得られました。以上の皆様に心から感謝いたします。

（星住英夫・宮縁育夫）

【参加者の感想】

本巡検では、日本の活火山を代表する阿蘇火山の噴火活動に関する地質を見学しました。私の修士研究は三波川変成岩なので、本巡検中の火山用語に最初はほとんど聞き覚えがなかったのですが、露頭や地形観察と案内者の先生の丁寧な解説のおかげで理解を深めることができました。軽石や火山灰は普段ニュースなどでも聞く言葉ですが、この巡検に参加したことで、火山用語が具体的に何を指すのか理解できました。

午前8時頃、熊本大学全学教育棟の玄関前に案内者と参加者の総勢27名が集合しました。午前8時半にバスで出発して道の駅で休憩しながら阿蘇カルデラを横断し、巡検の最東端であるStop 1に向かいました。出発後しばらくして車内で全員が自己紹介をしました。私は火山に関してはほとんど知識がないので、この機会に新たな視点や知識を得たいと思い本巡検に参加したことを話しました。

Stop 1では大分県竹田市の露頭で阿蘇4火砕流堆積物下部と阿蘇4/3間の降下テフラを観察しました。想像よりも大きく、そしてとても綺麗な露頭でした。おもに軽石が含まれる層と火山灰が含まれる層がほぼ水平に交互に堆積しており、それらの間に土壌が挟まっていなかったことから連続した噴火堆積物との説明でした。正直なところ火山性堆積物と土壌の見分けは私には難しかったのですが、土壌の有無で休止期間の長さがわかるという解説から土壌の重要性を理解することができました。

Stop 2では阿蘇4A火砕流堆積物と阿蘇4B火砕流堆積物の露頭を観察しました。バスで移動中の車内で予め説明された通りに、露頭の崖は植物で覆われており、さらに到着直後に雨が降ってきたため露頭まではたどり着けなかったです。そのかわりに、少し遠方から観察したり、草を分け分けて転石をハンマーで割って溶結した阿蘇4B火砕流堆積物を観察したりしました。解説では、未固結の火山灰は十分な熱と自重による圧縮の結果として溶結するのですが、この露頭では上部の阿蘇4Bは溶結している一方で下部の阿蘇4Aは非溶結でした。なぜ上部だけが溶結したのかについては議論の余地があるそうです。先生方のお話を聞きながら視点を少し変えるだけで謎はまだたくさんあるのだと思いました。

Stop 3ではポストカルデラ期の降下テフラを観察しました。周辺には蕎麦畑が広がっており、露頭にもたくさんの植物が生えていました。Stop 1, 2とは異なり、黄色から茶色の層が重なり土壌も複数挟まっていました。土壌は黒ボク土であり、火山灰の上にイネ科植物が生育して形成されたとのことでした。解説を聞きながら土壌からも火山の情報が得られることに驚き、また私も広い知識を持って観察したいと思いました。始良Tn火山灰（AT）という層は広域テフラであり、鹿児島県のシラス起源というお話でした。その他、化学組成分析から、他地域にも阿蘇火山起源と考えられる火山灰が見つかっており、阿蘇火山噴火の規模の大きさを実感しました。

Stop 1からStop 3までカルデラ東方域の露頭観察をした後、阿蘇の中央火口丘群に向かいました。カルデラ内に入って、Stop 4の中岳火口に向かう途中で、Stop 6の米塚とStop 5の草千里ヶ浜を通り過ぎました（車内で説明もありました）。Stop 4の阿蘇火山中岳火口に近づくと前方に噴気が見えました。駐車

場からそのまま見学ルートに従って中岳火口を観察しました。中岳火口には7つの小さな火口があり、現在活発なのは第1火口です。幸い天気が回復したので火口付近の地質構造を広く見渡すことができました。火口壁面には火砕物が地形に合わせて堆積した様子や堆積物が断層で切られて大きく波打った構造など噴火当時の生々しさを感じました。Stop 4は阿蘇火山の一大観光地なので、旅行で訪れたとしても編模様の広がりや火口の大きさをくらくらいしか注目しなかったと思います。本巡検に参加したことで、目の前に広がる火山灰がつくる編模様の成因や溶岩とアグルチネートの違い、また駐車場のアスファルトの所々に刻まれた噴石が落下した痕跡など、観光では見過ごしてしまうような注目点をたくさん教えていただきました。

本巡検全体を通して火山について詳しくない私でもわかる説明をたくさんしてくださったので、阿蘇火山の規模の大きさ、一つ一つの層を持つ地質的な情報について広く深く学ぶことができました。時間の都合でStop 5とStop 6は車内からの見学となりましたが、Stop 4の中岳火口やStop 1～3までのカルデラ周辺域の観察地点で多くの学びを得られたと思います。本当にありがとうございます。（原田藍生 名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程1年）

Bコース 白亜紀北部九州バソリス巡検 報告

案内者：江島圭祐

巡検補助員：嶋田 翔・坂元伸晟

参加者：伊藤 優、小北康弘、金指由維、金丸龍夫、熊谷沙莉、齊藤 哲、齊藤大晃、下岡和也、新正裕尚、田口湧一、中橋甲斐、中山瀬那、西川 正、西本昌司、福井堂子、星博幸、星木勇作、森下知見、吉田 颯

【案内者の報告】

2025年開催の日本地質学会第132年学術大会（熊本大会）におけるBコース巡検「白亜紀北部九州バソリス：高マグネシウム閃緑岩の産状と深成岩類のマグマ供給システム」は、好天にも恵まれ、無事に巡検を終了することができた。本巡検では、白亜紀北部九州バソリスを構成する小規模岩体中から、特異な化学組成を持つ尺岳閃緑岩岩体とその周辺の火成岩類に焦点を当て、地殻浅所におけるマグマの挙動を観察することを目的とした。

巡検は小倉駅を出発後、まず貫入母岩である白亜紀の湖成層（脇野亜層群）を観察した（Stop 1）。ここでは、泥質岩と凝灰質砂岩の明瞭な層理面やそれに調和的に貫入する珪長質シル状岩脈を確認し、後のマグマ貫入の場となった地質構造の基礎を理解した。続いて、尺岳北部に分布する斑状細粒トータル岩の大規模露頭を訪れた（Stop 2）。この半深



Bコース



成岩体では、熱水変質作用の影響を示すような石やパンベリー石を含む脈が随所に見られ、マグマ固結末期の流体の活動について活発な議論が交わされた。その後、昼食を挟み、午後は尺岳の麓の樺谷沿いの沢に入り本巡検のハイライトである尺岳閃緑岩のマグマ供給系を追った。母岩の層理面に沿ってシル（岩床）が連続的に貫入する様子（Stop 3）や鉛直な岩脈が水平なシルへと折れ曲がり転換する産状（Stop 4）を間近で観察することができた。これは、既存の地質構造がマグマの上昇・定置プロセスをいかに支配するかを示す典型例であり、参加者からは多くの質問が寄せられた。Stop 4の露頭の一部が土砂に覆われていたことは反省すべき事項であった。さらに上流では、尺岳閃緑岩マグマが上昇中に捕獲したと考えられる巨大な結晶質石灰岩のゼノリス（捕獲岩）を観察し（Stop 5）、マグマ挙動と同化混染作用のダイナミクスに思いを馳せた。最後に、高マグネシウム安山岩（HMA）マグマに由来する尺岳閃緑岩の主岩相（両輝石閃緑岩）を観察し（Stop 6）、その特徴的な岩相と化学組成が当時のテクトニクス場を考察する上で重要な手がかりとなることを確認した。

本巡検を通して、岩脈からシルへの転換、そしてシート状のマグマパルスの累積による岩体形成（Sheet-on-sheet model）という、マグマ溜まりの成長プロセスを野外の事実に基づき具体的に示すことができた。ご参加いただいた皆様には、険しい沢歩きにもかかわらず、終始熱心に耳を傾け、鋭い視点でご議論いただけたことに心より感謝申し上げます。また、このような貴重な機会を与えてくださった日本地質学会行事委員会の皆様にも御礼を申し上げます。本巡検が参加者の皆様にとって、今後の研究や教育活動の些細な助けとなれば幸いです。

【参加者の感想文】

Bコースの巡検では、山口大学の江島先生に九州北部尺岳周辺の露頭を案内していただきました。普段私は花崗岩を研究しており、自分のフィールドはもちろん花崗岩露頭が中心であり、他に訪れた巡検や実習先でも観察したことのない内容であったためとても楽し

みにしていました。

Stop 1では、川に降り脇野垂層群の露頭とシル状岩脈を観察しました。岩脈が貫入している様子の確認できる露頭は、階段から川に降りたすぐ先で振り向くと足元に確認できたのですが、私は一瞬気づかず、ここがその露頭だと教えられここまで層理面に調和的貫入するものなのかと驚きました。Stop 2では、トータル岩とそれに貫入する岩脈を観察しました。こちらのトータル岩は、含まれている斜長石やホルンブレンド、黒雲母の変質が進んでいるようで全体的に白っぽい珪質な岩石のような見た目を観察できました。また、ここではなんと屋外で薄片観察ができる機器が登場し、実際の露頭上でその岩石薄片を観察するという貴重な体験もさせていただきました。Stop 3からStop 6までは尺岳の登山道を進みながら尺岳閃緑岩と花崗岩、脇野垂層群の露頭を観察していきました。Stop 4では、数メートルほどの高さがある露頭で、脇野垂層群に貫入している尺岳閃緑岩の様子を観察しました。ここでは脇野垂層群を垂直に貫くように尺岳閃緑岩が貫入し、その岩脈の先を追うと途中から層理面に調和的に貫入するシル状岩脈となっている様子が確認でき、どのようにマグマが進んでいったのか、と貫入当時に思いをはせながら露頭に張り付いていました。Stop 5では、尺岳閃緑岩が捕獲した結晶質石灰岩ゼノリスを観察しました。ここでは人が入れるほどの空間ができていたのですが、自然にできたものなのか、人為的にできたものなのか謎の空間であるようでした。Stop 6では、沢を進み尺岳閃緑岩の主岩相を観察していきました。沢の両側には壁のように露頭が存在し、進んだ最終地点では見事な滝が流れており、修験道の修業が行われる場所であったようでした。

今回、巡検前日までに九州地方では大雨であったため当日もどうなるかと心配ではありましたが、雨は降らずそして晴れ過ぎずという巡検にぴったりの天候で十分に満喫することができました。また、この巡検を企画してくださった江島先生、サポートしていただいた江島研究室の学生お二人には改めて感謝申し上げます。

（熊谷汐莉：愛媛大学理工学研究科）

Cコース 長崎変成岩

案内者：西山忠男、森 康、重野未来

参加者：會田幸樹、朝倉顯爾、荒屋佑樹、石橋 隆、磯山未遊、内野隆之、片桐星来、齊藤大晃、新正裕尚、高橋 慧、高橋瑞季、鳥居怜真、中山瀬那、原 英俊、星 輝、宮崎裕子、宮崎一博、山岡 健、吉丸 慧

【案内者の報告】

最初の観察地、西海市雪浦海岸には予定した時刻に到着し、お世話になっている西海市教育委員会の方々とも無事に合流出来て、巡検は順調に始まった。今回の参加者は19名中11名が20代の若い人たちで、女性も6人。私が50年ほど前に長崎変成岩の研究を始めた頃は、長崎変成岩に興味を持っている人は非常に少なかったし、蛇紋岩や交代作用、変成流体といった研究テーマは主流から外れた異端のテーマであった。それを思うと隔世の感がある。雪浦では「海岸で蛇紋岩を見るのは初めて」という人や、蛇紋岩と泥質片岩の反応帯を見て「マントル・クラスト境界だ!」と感激する人もいて（いや、そんな大袈裟なものではないのですが）、蛇紋岩の産状に多くの興味が集まったようだった。観察に時間がかり、急がなければと思っていたところに雷雲が西方海上より到達し、土砂降りの雨に見舞われた。蛇紋岩の大岩の陰に避難するよう指示したが、雷が落ちたらどうしようと気が気ではなかった。崖の縁を伝う小径を、釣り人が設置したロープを伝いながら登り、やっとの思いで崖上の道路に上がり、待っていたバスに乗り込む。全員びしょ濡れで、運転手からは、座席を汚されると明日使えなくなるんですよ、と苦情を言われる。明日の客より今日の客を大事にしろと言いたくなるが、ぐっと我慢する。予定より1時間遅れで第二の観察地三重海岸に到着。ここでも困難が待ち受けていた。海岸に下りるのに藪の中の小径を50mほど歩かねばならないが、6月に下見した折には苦も無く歩けた道が、夏の間に繁茂した草木のためにトンネルのようになっていて、匍匐前進しなければならなかった。これですいぶん体力を消耗。潮が少しず



Cコース：三重 新長崎漁港埠頭にて



Dコース

つ満ちてくる。参加者はこの海岸の美しい鉱物に目を奪われて、肝腎の岩石学を忘れてしまう。予定していたルートの半分ほどで巡検は打ち切らざるを得なかった。それ以上先に進むと潮が満ちてきて戻れなくなってしまった。この海岸のハイライトである大褶曲露頭や、含ザクロ石単斜輝岩などを観察できなかったのは残念だが、仕方がない。このように必ずしも条件が良いとは言えないハードな巡検であったが、誰一人文句を言わずについてきて下さったことは有難かった。とりわけ、6人の女性陣のタフな歩きには頼もしい思いを持った。さすが地質学会の巡検である。

(西山忠男)

【参加者の感想】

今回の巡検地西彼杵半島に分布する白亜紀低温高压型変成岩類は、野母半島、天草下島に分布する変成岩類と合わせて長崎変成岩類と総称される。長崎変成岩類は、蛇紋岩と結晶片岩類との間に発達する反応帯の研究や、構成鉱物が粗粒であることなどから変成鉱物の成長カネティクスの研究が行われてきたフィールドであり、ユニークな成果を世界に発信してきた。いずれも非平衡状態を前提とした新しい岩石学の構築に貢献している。

西彼杵半島には、西南日本外帯四国中央部三波川変成岩類エクロジャイト相ユニットに匹敵する粗粒な泥質片岩が延々と分布する。一方、小規模に分布する蛇紋岩体周囲(蛇紋岩メランジュ)には、マイクロダイヤモンドを含む超高压変成岩をはじめ、ひすい輝石岩、ざくろ石単斜輝石岩、オンファス輝石岩、ガーネットタイトなど特異な変成岩が産出

する。今回の巡検地は、蛇紋岩メランジュが分布する半島西岸北部の雪ノ浦と南部の三重の2カ所である。本巡検の参加者は全19名で、年齢別では20代の若い参加者が多かった。

最初の巡検地雪ノ浦海岸の入り口には激しく褶曲した苦鉄質片岩の露頭があり、参加者の注目を集めた。さらに、海岸沿いには、泥質片岩、蛇紋岩、及びこれらの間に発達する各種反応帯、及び反応帯から派生する各種炭酸塩鉱物脈が生じている。参加者が最初に驚くのは、泥質片岩の生じているアルバイト斑状変晶の大きさであろう。同様の泥質片岩は西彼杵半島全域に分布するが、マイクロダイヤモンドはこの雪ノ浦の一部の岩石からしか報告されていない。案内者の説明では、石墨-ダイヤモンド固相固相反応進行には、両者の平衡曲線よりはるかに高い圧力を必要とし、ダイヤモンド安定領域であっても石墨からダイヤモンドに転移することはないが、流体から析出した場合は、ダイヤモンドとして結晶化できるのであろうとのことであった。雪ノ浦海岸ではこの他にもリストベナイト中に生じたシュードタキライト脈と脈の内側に犬牙状に成長するマグネサイト、鮮やかな緑色をしたリストベナイト(長崎ひすい)、苦鉄質片岩中にレンズ状に含まれるガーネットタイトが目目を浴び、参加者は熱心に観察していた。しかし、西方の東シナ海上から積乱雲が急接近し、瞬間に土砂降りの雨となり、全員ずぶ濡れとなってしまった。30分ほどようやく雨は上がり、釣り人が使っているロープを伝って海岸から急斜面を登りバスが待つ車道へ出た。

雪ノ浦を後に、バスで西彼杵半島西岸を南下し、車内で遅い昼食を取った。途中、遠藤周作文学館近くの道の駅「夕陽が丘そとめ」で小休憩を取り、この時期としては強く感じる太陽の日差しで濡れた衣類を乾かし、2つ目の巡検地である三重海岸へ向かった。三重海岸では、ヒスイ輝石、オンファス輝石、緑色透明柱状のアクチノ閃石、黒色柱状のマグネシオホルンブレンド、滑石や緑泥石の葉片状結晶、磁鉄鉱の八面体自形結晶など、粗粒で綺麗な変成鉱物を見ることができ参加者は感激していたようだ。しかしながら、綺麗な変成鉱物に目を奪われ、肝心の交代作用

と変形作用について説明が頭に入ってくるにいい状況だったこと、時間が押していたため、今回は見事な褶曲構造が見える露頭、及び濃藍色柱状の藍閃石が入った変成岩の露頭などまで到達できなかったとは少し残念である。筆者は、この海岸の泥質片岩中のざくろ石のオストワルド成長を調べたことがある。この付近の泥質片岩中には、1cm近い粒径のざくろ石も存在する。西彼杵半島の変成岩類の構成鉱物が変成温度の割に非常に粗粒なのは、成長時間が長いことに加えて、2GPaというかなり高压な条件が想定されていることとも関係しているのかもしれない。

最後に、素潜りで海中に没したハンマーを回収した果敢な方、何よりも見応えのある露頭での地質学的説明とその準備を行っていたいた西山氏、森氏、重野氏に感謝の意を表したい。

(宮崎一博：産総研地質調査総合センター)

Dコース 九州中部の黒瀬川構造帯に見られるシルル紀から石炭紀の化石群

案内者：田中源吾

参加者：生形貴男、小川正之、小田 学、川路芳弘、小宮 剛、斎藤 真、佐藤希望、佐藤浩介、四木りさ、中澤努、新山碩人、渡辺正幸

【案内者の報告】

9月17日、巡検Dコース「九州中部の黒瀬川帯にみられるシルル紀から石炭紀の化石群」が実施された。巡検地までの道が狭い場所もあり、マイクロバスを使用したため、12名と少ない定員設定であった。しかし、北は北海道から南は熊本まで、シニア会員から高校生と、全国各地から地層や化石に興味のある方が集まった。直前の熊本大雨の影響で、Stop 2の古鱗木産地は中止せざるを得なかった。その分、Stop 1の祇園山のシルル紀およびStop 3の泉町の石炭紀において、地層の観察と化石の採集に多くの時間を充てることができた。祇園山は、故濱田隆士先生が精力的



Cコース：雪ノ浦海岸での様子

に御研究された日本のシルル紀の‘模式地’である。参加者はそれぞれ目当ての地層、岩石を観察し、クサリサンゴやハチノスサンゴを採集した。なかには三葉虫を発見した参加者もあった。また、参加者の中には濱田先生の御講義を学生時代に聴講された方もおられた。Stop 3の泉町では、柿迫層の石灰岩を観察、微化石の抽出法について、現場で解説した。柿迫層は故勘米良先生が戦後間もないころ、調査された場所である。参加者に勘米良先生の教え子があり、現地で詳細な勘米良マップを見せて戴いた。巡検場所のルートマップもあり、勘米良先生を思い出しながら、巡検に参加したとのことだった。80年経過しても色褪せない勘米良先生のルートマップに、私も感激した。本巡検には、低用図幅を作成された産業総合技術研究所の斎藤先生をはじめ、中澤先生、東京大学の小宮先生や現日本古生物学会会長の生形先生（京都大学）も参加され、現地では参加者の間で、古生物のみならず、岩石やテクトニクスなど、議論も交わされていた。祇園山で一時的に雨に見舞われてしまったものの、全体として天候に恵まれ、事故もなく無事に巡検を終えることができた。最後に本巡検に際し、私有地での化石採集を快く許可して戴いた地権者の西尾氏に厚く御礼申し上げる。

【参加者の感想】

Dコースでは、田中源吾先生の案内の下で、九州中部の黒瀬川帯にみられるシルル紀から石炭紀の化石群の観察および採取を行った。巡検はStop 1シルル系祇園山層中部層、Stop 3石炭系柿迫層の2地点で行われ、当初予定されていたStop 2のデボン紀山出層は8月の豪雨災害の被害に伴い、中止となった。私は現在、古生代中期の堆積岩を用いたバイオマーカー分析による古環境・古生態系の復元を行っており、本巡検は自身の研究分野と時代が合っていたことから非常に興味をそそられた。また、普段はフィールドワークをしていないこともあり、実際に化石に触れられるこの巡検は貴重な機会と感じ、参加を決意した。

Stop 1では、祇園山において前期シルル紀後期～中期シルル紀前期に対比される祇園山層下部層と中部層を観察した。下部層は凝灰質砂岩泥岩互層で構成されており、露頭の周りにごろごろとした角ばった岩が転がってお



Dコース：Stop3：石炭系柿迫層（氷川）の露頭

り、ハチノスサンゴなどの化石を見つけた参加者も多かった。また、中部層は黒色泥岩に支持された石灰岩礫層で構成されており、露頭をハンマーで少し掘ると、三葉虫や介形虫が含まれる手のひら大のノジュールがごろりと出てきた。途中、雷雲に囲まれて雨が降ったものの、巡検は滞りなく進められた。

Stop 3では、氷川において下部～中石炭系の海成層である柿迫層を観察した。露頭には、割ると腐乱臭がするような黒色石灰岩が点在していた。岩石中には肉眼では見えないほどの三葉虫や介形虫が含まれており、酸処理によって取り出すことができると説明があった。Stop 1の凝灰岩よりも石灰岩は固く、他の参加者も岩石を割るのに苦労していた。また、過去に作られた氷川のルートマップを持参した参加者もあり、他の参加者も集まって、今回の巡検地点がルートマップ上のどの位置に相当するのかなど議論が生まれる場面もあった。

フィールドワークに慣れていない私にとって、固い古生代の岩石から化石を採取することは困難を極めた。一方で、実際に露頭を観察した体験は今後の研究生活において、とても有意義のものであると感じた。最後に、本巡検の参加に際して、案内をしてくださった田中先生、また慣れない山や川に戸惑う私を見かねて登りやすいルートを教えてくださいと、滑りやすい川辺で手を貸してくださいと、大いに助けていただいた参加者の方々に深くお礼を申し上げる。

（四木りさ：北海道大理学院自然史科学専攻）

Eコース 天草地域に分布する白亜系姫浦層群の堆積相—海底扇状地における堆積過程—

案内者：成瀬 元、小松俊文

参加者：飯島力、池田雅志、大友幸子、岡田誠、加藤三咲、川並仁美、河野憲二郎、佐藤碧人、Doan Dinh Hung、杉本優月、塚田結衣、中嶋健、仲谷英夫、福地亮介、福本朋子、村田文子、山岸昇玄、山田昌樹、吉田聡、吉村成公

【案内者の報告】

本コースでは、熊本県天草上島および宇土半島に分布する白亜系姫浦層群の堆積相を題材に、海底扇状地システムの内部構造と堆積過程を現地で観察した。直前に熊本を襲った豪雨により道路状況が悪化したため、当初の予定を変更して龍ヶ岳展望所（Stop 3）は残念ながら省略することにし、参加者は御奥来海岸（Stop 1）、維和島採石場（Stop 6）、天草ビジターセンター（Stop 2）、櫛島（Stop 4）、阿村海岸（Stop 5）、を順に巡った。

姫浦層群はサントニアンからカンパニアンに堆積した砂岩・泥岩互層を主体とし、基盤

の肥後変成岩類や御所浦層群を不整合に覆う。これらの地層は河川・エスチュアリーから海底扇状地チャネルおよび自然堤防堆積物まで、陸域から深海域にわたる多様な堆積環境を記録している。各露頭では、淘汰の悪い含礫泥岩、トラフ型斜交層理をもつ厚層砂岩、そして薄層泥岩の互層からなる自然堤防堆積物などを観察し、重力流の流動様式やチャネル-自然堤防複合体の内部構造を議論した。初日のStop 1御奥来海岸では垂直な側壁をもつ珍しい形状の土石流チャネル堆積物を観察した。Stop 6維和島島採石場では、チャネル充填砂岩層から自然堤防泥岩層への上方向細粒化が明瞭であり、自然堤防破堤に由来するクレパススプレッド状砂岩も確認された。このような大規模露頭での観察は、重力流堆積物の三次元的な幾何や流路形態の復元に極めて有効であり、深海堆積盆の地質記録解釈にも応用可能である。その後、初日は天草ビジターセンターで天草諸島全体の地質や文化についての展示と動画説明を見学し、櫛島に宿泊した。翌日はStop 4櫛島で不整合とその直上の内湾堆積物を観察したのちに、Stop 5阿村海岸で海底チャネル堆積物の詳細な堆積構造を観察した。この露頭では海底チャネルの蛇行に伴う側方付加構造をよく観察することができた。当日は残暑の中での巡検となったが、各地点では活発な議論が交わされ、参加者の皆さんとともに堆積学の基礎から最新研究までを議論する充実した時間となった。天草の良好な海岸露頭は、堆積プロセスの現場観察と教育において格好の教材であることを改めて実感した。ご協力いただいた参加者の皆様に深く感謝申し上げる。

（成瀬 元）

【参加者の感想】

Eコースでは、熊本大学の小松先生・京都大学の成瀬先生に案内いただき、天草地域に分布する白亜系姫浦層群の露頭を観察しました。観察地点の姫浦層群は主に深い環境で堆積する海底扇状地の地層であり、巡検を通して海底扇状地の地質記録が持つ特徴や海底扇状地内部で起こる現象について理解を深めることができました。

STOP1では、海底扇状地内部で起こる土石流の堆積物を観察しました。整然と堆積した砂泥互層中に淘汰の悪い含礫泥岩層がコの字形に分布しており、海底扇状地内部でチャ



Eコース：Stop 1. 上部白亜系姫浦層群の土石流堆積物上に集まる巡検参加者



Eコース：背景は八代海で対岸には八代・葦北地域の山並みが Gコース：阿蘇火口にて
広がっている



ネル状に堆積する土石流のイメージを鮮明に持つことができました。

STOP2のビジターセンターでは天草地域の地質や文化について学びました。STOP4～6では、採石場の大露頭および海岸露頭に露出する姫浦層群の観察を行い、様々な堆積環境で見られる構造や堆積環境の変遷について理解を深めました。ルートを歩いていくと、トラフ型斜交層理が発達する粗粒砂岩層がイノセラムス等を産する泥岩層に漸移したり、リップルがみられる規則的な砂泥互層が緩い斜交層理を示す砂岩層になったりと、様々に移り変わる堆積相が観察されたことが印象的です。地層に残された痕跡から堆積環境の変化を追跡するという堆積岩研究の醍醐味を味わうことができ、とても楽しく実りある巡検でした。

巡検中は案内者の先生方と参加者の皆様の議論からも沢山の学びを得ることができました。案内者の小松先生・成瀬先生、ならびに参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

(川並仁美：筑波大学理工情報生命学院 修士2年)

Fコース 九州東部のジュラ紀付加体巡検

案内者：尾上哲治、武藤 俊、富松由希
参加者：安邊啓明、出本紀子、内野隆之、尾勢康貴、高山信紀、多久和風花、外山 真、鳥居怜真、中村 葵、永山和久、新山碩人、古山精史朗、松岡 篤、元村健人、森野善広、山口飛鳥、八幡伊織、葭井功輔、吉澤和子、吉野剛志

Gコース 阿蘇ジオパークにおける地球科学と神話の繋がり：阿蘇カルデラの蹴破り伝説を例として

案内者：池辺伸一郎、松田博貴
参加者：相川雅門、鎧 顕正、天野一男、飯

島 力、小河原孝彦、奥木さくら、小堤健紀、小野紗也香、蟹江康光、蟹江由紀、亀高正男、楠田哲也、栗山絵理、後藤 聡、齋藤洋輔、高木幸市、田村健史郎、土屋 奏、中尾賢一、双木正和、野田百花、藤田由美子、細谷正夫、松原美友、南 将行、吉村成公

【案内者の報告】

Gコースは、阿蘇ユネスコ世界ジオパーク（以下、阿蘇ジオパーク）を巡検地に、アウトリーチ巡検として実施された。阿蘇ジオパークは、活発に活動続ける中岳を中心に、火山が生み出す雄大かつ多様な火山地形や地質、ならびに豊富な湧泉や温泉などが特徴のジオパークである。また古くから人々の営みが繰り返され、特有の信仰・歴史・文化・景観が育まれてきた。一方、集中豪雨や断続的に続く中岳噴火、そして熊本地震などの災害を経験し、減災という視点から地形・地質遺産を再認識し、中でも神話や地元の伝承を災害の教訓として見なおす動きが盛んになってきた。そこで本巡検では、健甕龍命にまつわる「立野の蹴破り伝説」に注目し、その関連スポットを巡った。

Stop. 1：新阿蘇大橋ヨ・ミュール 立野火口瀬一帯を展望できるここでは、阿蘇火山の成り立ちと地形・地質、ならびに熊本地震の被災箇所について概観した。あわせて健甕龍命が外輪山の一部を蹴破ったことにより、カルデラ湖が消滅し、肥沃な水田地帯が形成されたとする「立野の蹴破り伝説」の概要が紹介された。また次の見学地への移動途中で旧阿蘇大橋を崩落させた「数鹿流崩れ」の跡を見学した。

Stop. 2：国造神社 国造神社は阿蘇谷の開拓に伴う農業神・開拓神を祀るため約2,000年前に創建されたものであり、後に阿蘇氏が中岳火口をご神体とする火山神信仰を融合させて「阿蘇神社」(Stop. 3) を起こしたとされている。緑濃い境内の鯨宮には「立野の蹴破り伝説」に出てくる鯨が祀られている。

Stop. 3：阿蘇神社 阿蘇神社は約2,300年前に創建されたと伝えられ（国造神社の創建年代と矛盾するが）、現在の社殿群は天保～嘉永年間に立てられた。ただ「日本三大楼門」の一つである楼門は熊本地震で倒壊し、

令和5年に再建されている。ここではジオガイドの佐久間研治氏により、阿蘇神社の再建や阿蘇中岳をご神体と崇める横参道について紹介がなされた。神社周辺には多くの湧水が存在し、参加者は門前町を散策しながら、銘々、昼食を摂った。

Stop. 4：阿蘇中岳 中央火口丘群の斜面災害跡、草千里ヶ浜火山や宗教遺跡の「古坊中」を車窓に見ながら阿蘇中岳火口へと向かった。観光客で賑わう火口周辺での噴石や火山ガスに対する安全対策の解説を受けた後、火口縁で最近の中岳の火山活動について説明がなされ、活発に質疑が行われた。

Stop. 5：池の川水源 中央火口丘群南側の南郷谷に位置する池の川水源は、山麓に多数ある湧水群の一つである。毎分約5トンの湧水量を誇り、生活用水や農業用水として使用されている。ここにも水没するか否かにより豊凶を占う「兜岩」にまつわる民間伝承が伝わっていることが説明された。帰路の途中、長陽大橋で立野火口瀬を見下ろしながら、この日見学した地形や地質、そしてそこでの生業と神話・伝承について総括がなされ、自然と共生してきた古からの阿蘇の人々の営みに想いを馳せた。

巡検参加者は、ジュニアセッション参加者の高校生4名や一般の方も含む26名であり、幅広い年代の方が参加された。多くの方に阿蘇ジオパークの魅力を知っていただくと共に、地形・地質のみならず、そこでの人々の営みにより育まれた信仰・歴史・文化が神話・伝承という形で語り継がれていることを知っていただければ幸いである。



Gコース：立野火口瀬

【参加者の感想】

阿蘇ユネスコジオパークを巡る今回の巡検は、地域に伝わる神話や伝承と地形・地質との関わりを学び、そこから自然災害への教訓を得るという貴重な機会であった。特に印象に残ったのは、「健甕龍命（たていわたつのみこと）」による立野の蹴破り伝承にまつわる場所を訪れたことだ。この伝承については、『大地と人の物語』（日本地質学会編、2025）でも紹介されており、それを読んでぜひ現地を訪れてみたいと思い参加した。

外輪山が途切れ、黒川と白川が合流してカルデラ外へ流れ出す場所を見通す「ヨ・ミョール」に立ったとき、まさに健甕龍命が蹴破ったという現場に立っているという実感に胸が高鳴った。昔の人々がカルデラ湖の消滅をどのように見て、どんな思いでこの伝承を語り継いだのかを想像すると、自然への畏れと敬意が感じられロマンを覚えた。

また、地質学的調査によってカルデラ湖の流出が実際に確認されていることを知り、科学と伝承の両面から大地を理解することの面白さを感じた。2016年の熊本地震で動いた活断層も望むことができ、自然現象と神話を結びつけて語ることが人々に防災意識を促す手段にもなり得ると考えた。国造神社の鯉宮で出会った湖水流出時に流された鯉の伝承にも、人々が水の恵みと災いを共に見つめてきた歴史を感じた。

最後に訪れた「池の川水源」では、兜岩が水没すると凶作になるという伝承を聞き、自然と生活が密接に結びついていた昔の人々の感性に思いをはせた。実際に柄杓で水をすくって飲んでみると、その美味しさに驚いた。大会会場の熊本大学の生協食堂の水も大変美味しかったが、熊本市の上水道が阿蘇の豊かな地下水に支えられていることを知り地形と人の暮らしのつながりを実感した。私の愛飲するボルヴィックも火山起源の水であることを思い出し、世界各地で火山と人々の生活が深く結びついていることを改めて感じた。

神話や伝承を通じて地質現象を理解することは、科学と文化の橋渡しとなり、市民が大地の営みに関心を持つきっかけにもなるだろう。自然と人との共生を考える上で、ジオパークの果たす役割の大きさを再認識した巡検であった。案内してくださった池辺伸一郎氏

と松田博貴氏に心から感謝したい。

（天野一男：東京大学空間情報科学研究センター客員研究員）

Hコース

2026年熊本地震の痕跡と布田川断層

案内者：鳥井真之、遠田晋次、奥野 充

参加者：青地 優、青島 晃、石渡 明、小俣雅志、香川 淳、風岡 修、金澤安蓮、川辺文久、楠田哲也、小林記之、酒井 亨、佐々木勇人、塩畑惣介、渋谷典幸、周藤優子、関川真佑子、高橋直樹、豊留一輝、永井翔、中尾賢一、中川知津子、長谷海王、西村秀範、山崎 誠、渡邊和輝

【案内者の報告】

巡検コース：8:30熊本県庁防災センター集合→9:30 益城町福田町民グランド駐車場→10:45 西原村萌の里→11:50 南阿蘇村復興公園ロータリー→13:10 杉養蜂園(南阿蘇村下野)前トレンチ調査現場→14:10旧阿蘇大橋→14:30 数鹿流崩れ駐車場→15:05立野ダム管理事務所駐車場→16:25JR肥後大津駅解散
主な見学対象：[1]地震前後で採取した断層はぎ取り標本の比較 [2] 断層トレンチ露頭 ([1]採取地点) [3] 布田川断層露頭 [4]緩斜面での斜面災害・阿蘇近傍のテフラ [5] 大規模斜面災害と断層地形 [6]過去の地震による変形（トレンチ調査現場）[7] 布田川断層露頭

【参加者の報告】

この巡検では、2016年熊本地震で現れた代表的な地表地震断層や災害の発生地を見学しました。私はこの巡検のStop 7の近く（南阿蘇村立野地区）が出身地です。修士課程修了まで私と家族が、その後両親が住んでいた家屋がありましたが、地震の二次災害（土石流）で全壊しました。このこともあり、2017年8月に日本第四紀学会が主催した熊本地震の巡検にも参加したことがあります。今回の巡検の案内者の鳥井先生、奥野先生、遠田先生は、第四紀学会の巡検でも3人で案内者を務めておられました。また、見学地も一部が共通しています。

Stop 1の熊本県庁防災センターでは、益城

町田中地区での布田川断層のはぎ取り標本が2点並べて展示されていました。右側は熊本地震以前の1995年に、左側は地震後の2023年に作成されたもので、同じ場所が熊本地震の前後で比較できる展示になっていました。基本的には、同じ断層面がずれていることが確認できます。同じ場所で地震前・後に掘削して比較したのは世界3例目だそうです。Stop 2では、この調査が行われた現場に行き、トレンチ壁面を観察しました。

Stop 3では、布田川断層（右横ずれ断層）の南側を並走する出ノ口断層（北落ち正断層）を遠望しました。地下の断層運動が地表に向かって分岐するモデルで説明でき、また、一つの地震で横ずれ断層と縦ずれ断層が同時に変位した例として世界2例目だそうです。

Stop 4は京都大学火山研究センターのある高野台地区周辺で、南阿蘇村復興公園となっています。ここでは緩傾斜にもかかわらず大規模な斜面の崩壊が発生しました。ずいぶん草むしていましたが、崩壊地形は残されていました。

Stop 5に向かう途中で、杉養蜂園(南阿蘇村下野)前のトレンチ調査現場へ行きました。遠田先生による解説があり、質疑応答が活発に行われていました。

Stop 5では、落橋した旧阿蘇大橋周辺と保存された旧国道の右横ずれを観察しました。Stop 6では、その対岸（黒川右岸）の大規模斜面崩壊（数鹿流崩れ）と黒川の侵食谷を遠望しました。橋桁や橋梁の残骸は、震災遺構として保存されています。

Stop 7は立野ダムとその周辺で、ダム上流の白川右岸には、みごとな柱状節理の立野溶岩が見られました。また、ダムの上流約500mの地点に熊本地震前から北向山断層として記載・図示されていた断層露頭を観察しました。第四紀学会の巡検でもここを訪れており、今回が2回目でした。

この巡検で、私の出身地でもある布田川断層帯周辺の地質を概観し、特に熊本地震の痕跡について詳しく学ぶことができました。また、地震の遺構も積極的に保存する方向で動いていることも理解できました。案内者の皆様や他の参加者の皆様に感謝申し上げます。

（中尾賢一：徳島県立博物館）

熊本大会 2025年度受賞記念講演

2025年度日本地質学会各賞の受賞記念講演・スピーチ（2025年9月14日：熊本大学）の内容をもとに各受賞者の皆様に原稿をご執筆いただきました。

Reminiscences of Akiho Miyashiro

日本地質学会都城秋穂賞

A. M. Celâl Şengör (İstanbul Technical University)

When Columbia University in New York failed to find a position for Professor Akiho Miyashiro, Professor John F. Dewey in the State University of New York at Albany, Department of Geological Sciences, jumped at the opportunity, ran to the President of the University and told him that they had a unique opportunity to hire an amazing Japanese geologist, one of the world leaders in metamorphic petrology. The president said 'Offer him a full professorship with the same salary as that of yourself'. Thus was hired Akiho Miyashiro by the Albany Department and helped with such giants as John F. Dewey and Kevin C. A. Burke and a handful of prominent younger colleagues to make that department one of the most prominent geology departments in the whole world.

I joined the Department of Geological Sciences of the State University of New York at Albany during the Spring Semester of 1977 as a third-year undergraduate. Shortly afterwards Professor John Dewey asked me to give a seminar on the history of tectonics, which I did. After my seminar Professor Miyashiro came up to me and asked whether I considered publishing what I said. I said that I did not, as what I said was common knowledge. He smiled and said 'Oh, no! Especially not in America. You must publish it.' At the end of the semester he invited me to his office and asked me whether I would be willing to put what I had said in my seminar into a chapter to be published in a book he was writing with Professor Keiiti Aki on orogeny to be published by Iwanami Shoten in Japan in Japanese. I answered that I would be most honoured to do so, but that the library facilities in Albany were not good enough to enable me to write it and asked whether it would be all right that I write it in my home in Istanbul during the Summer vacation. He said that would be no problem. I accordingly wrote my chapter and handed it to him when I returned to Albany in late August 1977. Professor Miyashiro translated it into Japanese and it appeared as chapter 1 of the book he published with Aki in 1979. In the preface of that book Professor Miyashiro wrote a few lines about me to introduce me to the Japanese readership.

When I looked at what he wrote about me, I recognised Houston and Albany typeset in Latin letters, but there was no Istanbul. When I remarked about that and said that he had mentioned where I was educated, but not where I was born and raised. He said that was not true. He had mentioned İstanbul, but İstanbul had a Japanese name and could be written in Japanese characters, which was not true for Houston and Albany.

Shortly afterwards Professor Miyashiro told me that the book was to be translated into English and published by John Wiley & Sons and asked me whether I wished to make any changes in my chapter. I told him that I could make a few small additions to which he graciously consented. The book was published in English under the authorship of Miyashiro, Aki and Şengör. It was later translated into Russian, German and twice into Chinese.



After that a close relationship between myself and Professor Miyashiro developed and I often went to his office for chats during which I learnt an enormous amount and not only about geology. For instance, once we got to talk about the Scottish geologist William Maclure, 'the father of American geology'. Miyashiro told me that Maclure was closely involved, as a social experimenter on new types of community life, and he collaborated with British social reformer Robert Owen (1771–1854), in the utopian settlement of New Harmony in Indiana. I knew about Maclure, but not about this aspect of his life before. He taught me many similar things in addition to much geology. He also questioned me about Turkish history and culture. Miyashiro was a great intellectual with wide-ranging interests.

When I began working on the geology of Asia, I became interested in the development of geology in Asian countries. I asked Professor Miyashiro to tell me about the development of tectonics in Japan. In response he produced a written account, which I keep. I sent a copy to my friend Professor Yukio Isozaki with the hope that it might be published in Japan possibly as Miyashiro's last paper.

When I joined the department in Albany, I asked Professor Miyashiro to give me offprints of his papers, which he generously did. The collection did not contain, however, his great classic 'The Evolution of Metamorphic Belts'. I assumed he no longer had reprints of that important paper in which he had put forward the idea of paired metamorphic belts. Five years later, the day I passed my PhD examination, as I was passing in front of his office, he came out and invited me inside. In the office he handed me a yellow envelope. When I opened the

envelope I saw that it contained an offprint of 'The Evolution of Metamorphic Belts' paper, signed to 'Dr. A. M. Celâl Şengör with the author's compliments'. He had evidently waited all those years until I got my doctorate to give me one of his very last copies of that classical paper.

I took his course on metamorphic petrology and learnt

an immense amount and got all A's on my examinations. I still keep my final examination paper as a memento from Professor Miyashiro as it carries his hand-written 'A' on it.

Akiho Miyashiro was one of the greatest men who touched my life and enormously enriched it. I am extremely grateful for it.

太平洋に散らばった白亜紀最大の火山活動の痕跡

日本地質学会小澤儀明賞

松本廣直（筑波大学生命環境系）

はじめに

筑波大学の松本廣直です。この度は小澤儀明賞をいただき大変光栄に思っております。この賞に推薦していただいた黒田潤一郎先生を始め、これまでお世話になった方々にこの場を借りて深く感謝申し上げます。

まず、この賞に名前を残す小澤儀明先生に関して説明させていただきます。小澤儀明先生は1899年に山梨県で生まれ、1920年に東京帝国大学理学部地質学科に入学しました。卒業後はすぐ助手として採用され、1925年に助教授に昇任、1929年に享年31歳で亡くなるまでに40編以上の論文を残しました。特に秋吉石灰岩の褶曲に関する研究はご存じの方も多いのではないでしょうか。また、1920年代という時代背景にも関わらず、アメリカ合衆国スミソニアン博物館のCushman博士と、精力的に国際研究を行っていたことは特筆に値します。

私が小澤先生を知ったのは2018年に、黒田潤一郎先生とともにスミソニアン博物館に訪れた時です。博物館のBrian Huber博士に、小澤先生の来館記録を見せていただきました。この来館サインには“Yoshiaki Ozawa, Tokyo, Japan, Jan. 5, 1929”と書かれています。この時期、小澤先生はボストンに滞在していたとの記録がありますので、おそらくその滞在中にスミソニアン博物館のCushman博士の元を訪れた時に書かれたものだと考えられます。小澤先生はこの年の8月に日本に帰国し、12月に腸チフスにより亡くなっています。ですので、このサインは小澤先生の亡くなった年の初めに書かれたものということになります。この出来事を機に小澤先生の論文に目を止める機会も増え、また2年前に秋吉台へ旅行に行った際に、小澤先生の業績の一部を垣間見ることができたのも良い思い出です。このような偉大な研究者の名前を冠した賞をいただくことができ、身の引き締まる思いです。

私の略歴を紹介させていただきます。私は2012年に都立国立高校を卒業した後、東京大学理科Ⅱ類に入学しました。1年次の教養学部で受けた、小宮剛先生、高橋聡先生の講義に強い影響を受け、理学部地球惑星環境学科へ進学しました。卒業研究では高橋聡先生のもと、愛知県犬山地域から産出するコノント化石の化学分析を行いました。修士課程からは大気海洋研究所の黒田潤一郎先生の下で白亜紀の古環境研究を行いました。特に、堆積岩のOs同位体比分析を中心に、鉛炭素同位体比分析・ラマン、そして微化石層序などの手法を組み合わせ、大規模

火山活動と環境変動の関連解明を目指し研究を行いました。黒田先生には自由気ままに好きな研究をさせていただくとともに、研究費を全面的にサポートしていただき、深く感謝しております。学生の立場でありながら自立した研究生生活を送れたことは非常に貴重な経験であり、自分の研究哲学を形成するうえでも重要な時間だったと感じています。2022年に博士課程を修了し、海洋研究開発機構の鈴木勝彦さんのもとでポスドクとして研究を行った後、昨年、現在所属している筑波大学生命環境系に着任いたしました。



私の研究について

さて、私のこれまでの研究について紹介いたします。私の白亜紀研究の始まりは修士1年のイタリア調査でした。古い時代を研究したいという私の要望のもとに、指導教員の黒田先生に無理をお願いしてイタリアへ連れて行っていただきました。イタリアには白亜紀すべてを網羅する、保存状態の良い堆積岩が連続的に露出しており、そのスケールに圧倒されたことを覚えています。このイタリア始めた研究が、白亜紀を象徴する地質学的イベントである海洋無酸素事変（Oceanic Anoxic Event: OAE）です。OAEは海洋の広い範囲で有機物が突発的に大量堆積する現象で、当時の海洋では酸素濃度が大きく低下していたと考えられています。このOAEという概念が提唱されてから約50年が経ち、その引き金や発生メカニズムに関して精力的に研究が進められてきました。その中で明らかになってきた最も重要な発見の一つが、多くのOAEが大規模な火山活動に起因していた可能性が高い、という点です。

火山活動と環境変動の関連が特に研究されているのが、私が研究を行っている、今から約1億2000万年前に発生したOAE1aと呼ばれるイベントです。OAE1aは白亜紀海洋無酸素事変の中でも最大規模のもので、数十万年間にわたり海洋の広い範囲で有機物に富む堆積岩が出現しました。このOAE1aの引き金として有力視されているのが、西太平洋に位置する世界最大の

火山である。Ontong Java海台の火山活動です。これまでの研究で、Ontong Java海台の岩石年代がOAE1aの発生時期と大まかに一致すること、OAE1aの最中に海水のOs同位体比が急激にマンツルの値へ近づいたことが明らかになっており、これらはOntong Java海台とOAE1aの同時性を示す強い証拠だと考えられてきました。

しかし、私が研究を始めた当初、先行研究の多くはOAE1a周辺の約100万年間にのみ着目しており、火山活動が実際にどの程度続いたのかは分かっていませんでした。また、堆積岩中のOs同位体比は火山活動の存在を示唆する一方で、その発生場所に関する情報を直接的には持っていません。さらに、近年の放射年代測定の研究から、Ontong Java海台の形成年代がOAE1aよりも約1000万年若い可能性が指摘されており、両者の関連性について疑問が呈されています。このように世界最大の火山活動にもかかわらず、その活動時期・環境への影響に関して確実なことが言えないという状況でした。

しかし、Ontong Java海台の近傍には、これまでほとんど注目されてこなかった噴火の直接的証拠が残されています。1970～1980年代に太平洋域で行われたDeep Sea Drilling Program (DSDP)により、多数のコアが掘削されました。その中でも太平洋遠洋域のSites 167および463には、Ontong Java海台の噴火活動に由来する可能性のある、厚い火山灰層が確認されています。これらの火山灰は、OAE1aを記録しているのと同じ堆積層序に記録されているため、直接的にOntong Java海台の噴火活動と環境変動との時間関係の制約が可能です。しかしながら、これまで火山灰層の詳細な研究はほとんど行われていませんでした。そこで、私はこれらのコアで詳細なOs, C, Pb同位体比層序、生層序を確立し、火山灰の供給源・正確な堆積年代を調べました。

Sites 167, 463の火山灰層準でケイ酸塩のPb同位体比を調べたところOntong Java海台の値に近づくことが判明し、この火山灰がOntong Java海台起源ということを支持する結果となりました。また、これらのコアの詳細なOs, C同位体比分析の結果、太平洋の火山層はOAE1aの最中、特にOAE1aの始まり付近に堆積していることが判明しました。さらに、Ontong Java海台直上の石灰岩に含まれる有孔虫化石年代をコンパイルし、生層序学的に決定したOntong Java海台の噴出年代もOAE1aの年代と整合的であることが分かりました。以上の結果はオントンジャワの噴火活動とOAE1aが同時に発生したことを強く支持するものです。

加えて、私の研究ではOAE1aの後、1000万年間にわたる長期的な海水Os同対比変動を初めて明らかにしました。その過程で、(1)テチス海ではOAE1aの後にも複数の黒色頁岩が堆積していること、(2)これらの層準でもOs同位体比がマンツルの

値に急激に接近していることが判明しました。これはOAE1aの後にもOntong Java海台で噴火活動が続いており、そのたびに地域的なOAEを引き起こしていたことを示唆しています。特に、OAE1a直上の黒色頁岩に関してはこれまで提唱されていないイベントであることが判明し、「Wezel Level」という新しい地域的なOAEを提唱しました。

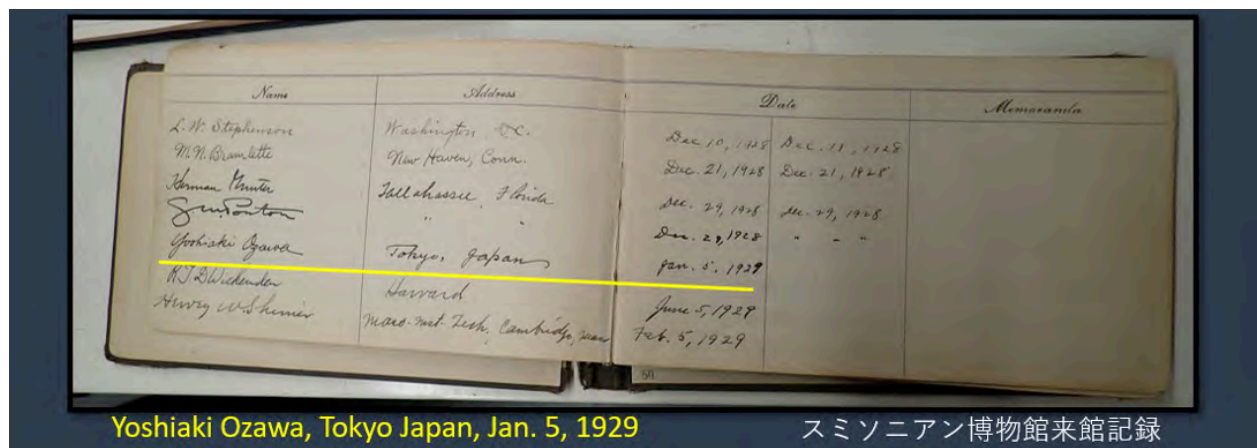
また、この期間には、Ontong Java近傍の太平洋地域において、菱鉄鉱と呼ばれる鉄の炭酸塩が大量に産出することが判明しました。これは、OAE1aのあとにも太平洋地域で活発な熱水活動が続いており、大量の鉄が海洋中に供給されたこと、太平洋地域においても貧酸素環境が長い間続いていたことを示しています。

私の研究でOntong Java海台の噴火活動が環境に与えた影響に関してこれまでとは違う描像が明らかになってきました。まず、OAE1aの最初期にOntong Java海台において、これまで知られていなかったような爆発的な噴火が発生したことが明らかになりました。このフェーズは短期間でありながら、大量のマンツル起源のOsとCを放出したと考えられます。また、Ontong Java海台の噴火活動はOAE1aのあとに数百万年間続いており、爆発的な噴火のたびにOs同位体比の低下と黒色頁岩の堆積、太平洋地域では菱鉄鉱といった熱水活動を示すシグナルが発生しました。このように、化学データ、化石、鉱物、火山灰など全く異なる視点を組み合わせることでこれまで分からなかった詳細な噴火活動の様子が明らかになりました。

さて、OAE1aを含むアプチアンという時代は火山活動・環境変動・生物の進化が密接に関連している時代です。例えばOAE1aのあと、浮遊性有孔虫の進化において初めて顕著な大型化・複雑化が起きました。現在私は白亜紀アプチアンの浮遊性有孔虫層序の研究を進めており、この時期の種変遷とバイオゾーンの見直しに取り組んでいます。ゆくゆくはこれまで明らかにしてきた地球化学的な情報に生層序を組み合わせ、火山活動が生物進化に与えた影響についても深く明らかにしていきたいと考えています。

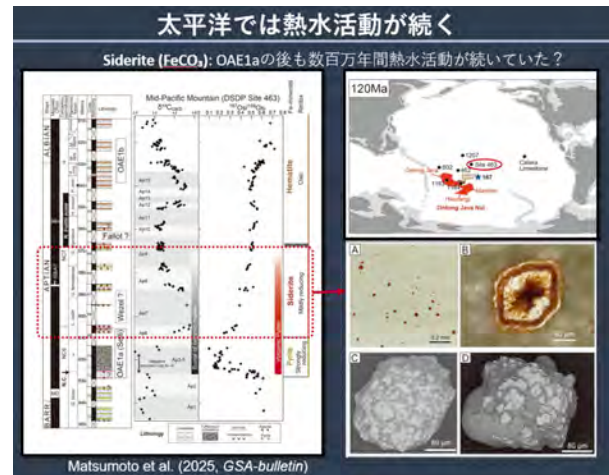
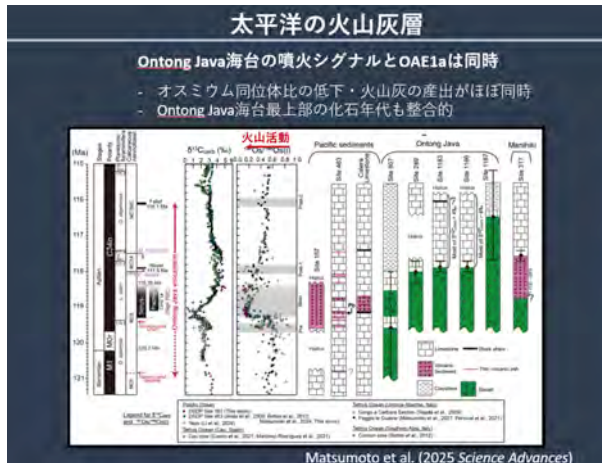
今後の抱負

最後にもう少し一般的な話をしたいと思います。現在日本の研究力低下が騒がれており、実際にそうなんだろうと感じることが多々あります。研究費が足りないと言われていますが、費用に見合った成果が得られていないのも事実です。また、そうになっている構造的な問題もあると思っています。このような状況の中で、今後私の研究活動で目指していきたい点があります。まず研究について、思い付きの研究で幅をひろげるのではなく、いかに研究の基盤となる本質的なデータを出せるかが重要だと思っています。自分にしかできない面白い視点で研究す



Yoshiaki Ozawa, Tokyo Japan, Jan. 5, 1929

スミソニアン博物館来館記録



るのはもちろん大切にしていきたいのですが、分野の基盤となる研究は何なのかを意識して研究に励みたいと思います。また、それを継続的に出し続けられる研究設備を整え、そこを拠点に様々な方を巻き込んで研究を広げていきたいと思っています。

もう一つ重要だと思っている点としては、20～30代の研究者が中心となって研究を進めていくことです。昨年訪れた中国の広州地球科学研究所では研究の主力は30代で、とても若い世代が研究を引っ張っていることに強い印象を受けました。私は20～30代は修行の期間ではなく、一番研究を進め、業績を出せる時期だと考えています。この賞の名前にもなっている小澤儀明先生も20～30代で活躍されていましたが、それを例外とするのではなく、どのようにそのような人を継続的に作り出す業界の雰囲気を作れるかというのが重要なテーマだと考えています。

これから自分ができる最も重要なアカデミアへの貢献は、次

世代の研究者の育成です。大学に就職してから学生の指導に当たることも多く、今後数十年の将来の研究者について責任を持つ立場になっていると感じています。今後優秀な学生が多く育ち、自分の研究がかすんでしまうくらいになればいいなと思っています。

最後になりますが、これまでの研究ではたくさんの方にお世話になりました。この謝辞を書きながら、これまでお世話になった多くの方々のことを思い返していましたが、挙げればきりがなく、書ききれないことに気がきました。改めて、さまざまな方々のご協力のもとで、研究を続けることができたのだと実感しました。もしこれまでの発表で少しでも面白いと思っていただけでしたら、それらは私の研究を支えてくれた皆さんのおかげだと思っていただいて間違いありません。本日は誠にありがとうございました。



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

シンポジウム『水底の文化遺産：湖底遺跡調査の最新動向』

本シンポジウムでは、「湖底遺跡」にスポットを当て、最新の研究の紹介、また、断片的だった知見を皆さんと共有したいと考えています。さらに、湖底遺跡研究の方向性や課題を整理し、水中考古学研究的未来像について議論を通して深めたいと思います。「桧原湖湖底遺跡」をはじめ、本格的な調査がスタートした「本栖湖」の最新成果の報告も予定しております。

共催：帝京大学文化財研究所、国立研究開発法人海洋研究開発機構

開催日時：2025年12月20日（土）13:00～17:00（12:00開場）

会場：東京文化財研究所・セミナー室

開催方法：ハイブリッド形式（対面・Zoomによる同時配信）

定員（事前申込制）：80名（先着順、対面参加）／オンライン参加：定員なし

参加費：無料

申し込み方法・詳細：<https://hibarajuku.labby.jp/news/detail/6464>

原子力総合シンポジウム2025

原子力総合シンポジウムは、我が国の原子

力について総合的な議論を行う場として、50年以上にわたり開催されており、日本学術会議と関係学協会の協力のもと、各界の識者を交え、中長期的な視点から議論を重ねてきました。

本年度は、以下のテーマに焦点を当て、産業界・政府・教育機関・国際機関など多様な観点から広く議論を行います：

- ・原子力プラントの安全性向上と持続的な活用に必要な総合的技術
- ・多様なステークホルダーをつなぐコミュニケーション
- ・国際社会との連携を図るためのマネジメントシステム
- ・人材の確保と育成の課題

また、見解案「ALPS処理水の海洋放出の影響評価と課題」に関する検討状況を報告し、多様な立場からの議論を深めます。

主催：日本学術会議 総合工学委員会 原子力安全に関する分科会

後援：日本地質学会ほか

日時：令和8年（2026年）1月19日（月）

10:00～17:00

場所：日本学術会議講堂（東京都港区六本木7-22-34）およびオンライン

参加費：無料

一般社団法人日本原子力学会 事務局

E-mail: symposium@aesj.or.jp

TEL: 03-3508-1261

プログラム等詳しくは、<https://www.aesj.net/nationalsymp2025>

文部科学省主催 STAR-Eプロジェクト第5回 研究フォーラム （研究成果公開シンポジウム）

近年、ビッグデータやAIを含む情報科学分野の進展を受け、地震調査研究において

も、従来の手法に加えて新たな技術の活用が期待されています。STAR-Eプロジェクト（令和3～令和7年度の5年間）は、こうした潮流を踏まえ、「情報科学×地震学」分野を推進する取組として展開してまいりました。これまでの研究フォーラムでは、同分野における最先端の研究成果や、アカデミアの知見が産学連携を通じて社会実装される事例、さらには今後の展望などを、採択課題の研究者およびゲストの皆様とともに発信してまいりました。このたび、第5回研究フォーラム（研究成果公開シンポジウム）を下記のとおり開催いたします。最終年度となる本年度は、STAR-Eプロジェクト採択課題の研究成果を広く一般公開する内容となっております。また、ゲストパネリストとして京都大学名誉教授 岩田知孝先生、大成建設株式会社 内山泰生氏をお招きし、採択課題の研究者の皆様とともに、地震研究と情報科学の融合によって生まれた知見を、防災や情報発信の技術にいかにつかひ、社会にどのように還元していくかについて語り合います。ぜひ多くの皆様にご参加いただけますと幸いです。

日時：2026年3月3日（火）15:00～18:00（予定）

形式：オンライン開催（参加無料・要事前登録）

テーマ：情報科学×地震学 研究成果公開シンポジウム ～知をつなぎ、地震防災技術を拓く～

主催：文部科学省

事務局：EY新日本有限責任監査法人

詳細・申込ページ：https://www.mext.go.jp/a_menu/kaihatu/jishin/projects/event.html

お問い合わせ

【事務局】EY新日本有限責任監査法人

メール：stare2021@jp.ey.com

担当：中前、山二、郷田

下敷き一干渉色図表・偏光顕微鏡による鉱物鑑定表一

岩石学を学習する学生さんをはじめ、偏光顕微鏡を使用する全ての方々へ、ぜひ活用ください。

プラスチック製、A4版、両面カラー、英語版

定価 **400円**（会員頒価 **300円**）（税込）

20枚以上お買い求めの場合 30%OFF!! 公費払いにも対応いたします

ご注文は学会事務局まで（TEL03-5823-1150/main@geosociety.jp）

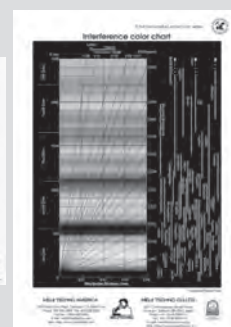
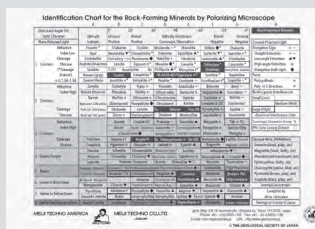




図1 岡山理科大学恐竜学博物館入口

info

岡山理科大学恐竜学博物館

〒700-0005

岡山県岡山市北区理大町1-1岡山理科大学C2号館1階

電話086-256-9804

<http://dinosaur.ous.ac.jp/museum.html>

開館時間：午前10時から午後4時45分

博物館・ジオパークで地球を学ぼう！（46）
岡山理科大学恐竜学博物館

現在進行形の研究現場が見える博物館

岡山理科大学恐竜学博物館 館長 藤田将人

岡山理科大学恐竜学博物館 名誉館長 石垣 忍

1. はじめに

岡山市と恐竜研究の関係は1991年に始まります。大阪の研究者グループが提唱した新古生物博物館構想が、岡山の民間企業・林原によって受け入れられ、博物館計画策定と大型骨格レプリカを中心とした世界各国からの標本収集、さらにモンゴル国科学アカデミーとのゴビ砂漠における共同発掘調査を軸とした学術研究が並行して進められました。これらの活動を通じて、多くの標本が日本にもたらされ、モンゴルとの国際学術交流の礎が築かれました。その後、親会社の経営再編に伴い博物館構想は中止となりましたが、モンゴル共同調査を含む研究事業および博物館活動の理念は2013年に岡山理科大学に継承されました。事業継承後、2014年には岡山理科大学生物地球学部で恐竜古生物学コースが、2025年には同大学同学部に恐竜学科が設立され、次世代の人材育成が本格的に展開されています。

2. 博物館の概要

岡山理科大学恐竜学博物館は、恐竜を中心とした自然科学教育と研究活動の拠点として2018年に開館した大学附属の博物館です（図1）。大学の強みを生かして、研究室・化石処理室・収蔵庫などの研究現場をそのまま「見

える化」した点に大きな特色があります。これに加えて構内各地の吹き抜けや渡り廊下、図書館内などを展示の場（サテライト展示）として活用し、古生物学の教育展示を配置しています。展示物との距離が近く、標本の観察を重視した展示設計が特徴です。屋内展示面積は約600㎡ですが、大学構内各所に見られる地質露頭や遺存種植物、石材中の化石なども観察できる野外展示も配置され、外部来館者は約1時間半かけて「大学構内での地球史散歩」を体験できます。

さらに、博物館運営における学生の参加も特色のひとつです。展示は教育課程と密接に連動し、学生は化石クリーニングや標本データベース構築、展示設計、制作などを授業や実習を通じて学びます。この仕組みは、研究とその社会還元を結び参加型の教育の場としても機能し、展示が常に更新される状態を生み出しています。つまり恐竜学博物館は、固定化された「完成品」ではなく、研究と学生教育の進展と共に変化し続ける「現在進行形の博物館」です。

3. メイン展示（C2号館1階）

モンゴル・ゴビ砂漠で発掘された恐竜と、発掘から化石のクリーニング、復元に至る一連の過程を可視化した展示構成が特徴です。

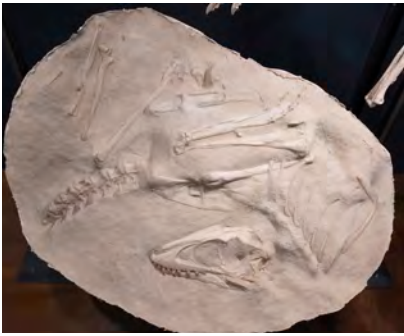
展示室横にはガラスを隔てて、化石処理室とCTスキャナーを設置した研究室が配され、クリーニングや研究の風景を見学できます（図2）。骨化石の形態から微細構造、堆積学や年代学まで、教員が実施している研究内容を基盤として展示が構成されています。また、教員や学生が関わった新発見や論文公表があった場合には、期間限定の小展示で研究内容を市民に公開しています。

当館の展示標本は、主に1990年代初頭から続くモンゴル科学アカデミー古生物学研究所との国際共同調査で発掘されたものです。協定に基づいてモンゴルに保管中の原標本の精巧なレプリカを展示しています。これらの標本はモンゴル以外では当館だけでしか見られないものを多く含み、展示のみならず、専門研究者による学術研究にも利用されている貴重な資料です。一例として、メイン展示ホールに展示されているゴビハドロスは全身の骨格がほぼ完璧に保存された原始的なハドロサウルス類です（図3）。本標本は若い個体であることから、頭蓋骨が分離された状態で発見された、極めてまれな化石です。また、モンゴルを代表する大型肉食恐竜であるタルボサウルスは、成体と幼体の骨格を並べて展示しています（図4）。幼体の歯が成体のものに比べて薄いことや、幼体の大腿骨に対する脛骨と中足骨の長さの比率が成体と比較して大きいなどの特徴から、成長に伴う食性や歩行様式の変化を考察することができます。さらに、頭が腰につくほど反り返った姿勢で化石になった幼体のタルボサウルス化石の産状化石も展示しています。これは水が多い環境で背中の靭帯が収縮した結果、このような姿で化石になったと考えられています（図5）。

そのほかにも、15体のプロトケラトプス幼体集団化石（図6）や、尾端骨を持つ恐竜と



左から、図2 化石処理室、図3 ゴビハドロスの全身骨格（レプリカ）、図4 タルボサウルスの成体と幼体の骨格を比較した展示



左から、図5 タルボサウルス（幼体）の産状化石（レプリカ）、図6 プロトケラトプス幼体集団化石（レプリカ）、図7 コリトサウルス全身非交連骨格標本。

して知られるノミンギアなど、発見時に国際的な注目を集めた学術的価値の高い標本も展示しています。

また、恐竜の骨格標本だけでなく、年代測定等の地質研究についての展示も展開しています。ゴビ砂漠の白亜系は海成層がなく、凝灰岩も乏しいため年代測定が困難な状況が続いていました。岡山理科大学の研究チームは、レーザー ICP-MSによるウラン-鉛年代測定を導入し、ゴビ砂漠に広がるカリチ層の形成時期を初めて特定しました。この成果は恐竜化石含有層の層序対比や古環境復元を精密化し、東アジアの恐竜相の比較に新たな視点を与えています。また、岡山理科大学では化石に残るタンパク質の抽出とアミノ酸配列の解析、機械工学的手法を用いた恐竜の歩様の解明など、総合科学的な手法で生物としての恐竜の解明に取り組んでいます。これらの研究成果に関しても今後展示を展開していく予定です。

4. サテライト展示1（C2号館3階図書館）

図書館内にアロサウルス、ヘレラサウルス、ヒブシロフォドンなど計7体の交連骨格標本や、2体の非交連骨格、各分類群の頭骨をはじめとする恐竜部分骨格が展示され、恐竜の解剖学的特徴、系統関係を学ぶことができます。展示は学習に配慮し、至近距離での観察を可能にしています。特にコリトサウルス全身非交連骨格標本は間近で実物化石を見ることができ、骨の形態学的特徴を学ぶのに適しています（図7）。古生物学の学習に欠



図8 ぶら理大の解説看板とウォレミア（通称ジュラシックツリー）

かせない各地質時代を代表する化石や、脊椎動物の解剖学を学ぶ上で重要な現生脊椎動物骨格群の展示も整備が進められています。長年の収集活動に加えて、近年はアマチュア収集家からの標本の寄贈も増加しており、これらを登録管理し展示に生かす作業を学生実習の一環として実施しています。

5. サテライト展示2（C1号館7階・50周年記念館1階）

C1号館7階エレベーターホールには、岡山県とその周辺で発見された代表的な化石を紹介しています。勝田層群（中新統）のピカリアなどの貝化石、浪形層（古第三系）の貝化石、山奥層（ジュラ系）の貝化石、成羽層群（三畳系）の植物化石群とモノチス（貝化石）、日南石灰岩（石炭系）のサンゴやウミユリ、アンモナイトなどを通じて、岡山の大地の歴史や多様な古環境を学ぶことができます。50周年記念館には2017年から2024年にかけての調査において、ゴビ砂漠で発見された恐竜足跡化石の実物大模型が展示されています。竜脚類と鳥脚類のものは世界最大級です。建物の前の路上には発見されたサイズそのままの一連の足跡が描かれていて、行跡の上を歩くことができます。

6. サテライト展示3（A1号館1階、4階図書館）

1階エントランスロビーには、体重7トンのアフリカゾウと、サウロロフスの脚の骨格を展示し、陸上に生息する大型動物である両者の脚の骨格の作りを比較しながら観察できるようになっています。さらに4階の図書館と、渡り廊下のエリアには、実物大のゴビ砂漠の発掘現場写真（大型恐竜骨格大型足跡化石）を敷き詰めた床面展示や、フィールド生活と発掘道具の展示を展開し、来館者は現場の様子を体感できるようになっています。

7. 「ぶら理大」—キャンパスを地球史博物館に—

大学キャンパス内に点在する豊富な自然史・考古学的資源を活かした教育普及プロジェクト「ぶら理大（ぶらりだい）」を展開しています。岡山キャンパスには、古第三系吉備

層群や付加体である超丹波帯の露頭、不整合、メタセコイアなどの遺存種植物、周辺の遺跡や山々を望む眺望地点など、88か所に及ぶ多様な教育資源が存在します。これらを“学内の地球史博物館”として整備し、学生が主体となって解説パネルや音声ガイドを制作・設置する実習を通して、地質古生物・考古植物の複合的な学びを実現しています（図8）。

本プロジェクトは、学生や来訪者が学内を歩きながら発見と学びを深める「地球史オリエンテーリング」として構成されています。QRコードを用いた音声ガイドはYouTube上に公開されており、スマートフォンから解説を聞くことができます。これにより、野外での学びとデジタル教材が融合し、地学教育の新たな体験型学習の一例となっています。「ぶら理大」は、大学構内を一つの野外博物館＝エコミュージアムとして再構築する試みであり、教育と地域連携を結びつける実践例として位置づけられています。

8. その他の教育普及活動

2025年度は、企画展「感動！世界の恐竜切手300点—骨と比べてみよう—」とギャラリートークを実施しました。また、岡山県の三畳系成羽層群から発見された西日本で初の魚竜化石及びモンゴルで発見された世界最古のパキケファロサウルス類や新属新種の哺乳類化石など、新たに学会発表や論文発表があった場合には、小規模展示を開催し、発表に関わった教員や学生によるギャラリートークを行いました。さらに、夏休みや年度末、連休、学園祭などでは教員による講座や学生による化石レプリカ作りワークショップを開催しており、学外から多くの方が参加されています。

9. おわりに

当館では土曜日、祝日には学生数人が展示解説を行っていて、来館者の皆様から大変好評を得ています。恐竜学科の教員も時々在館していますので、ゴビ砂漠での発掘調査や最先端の恐竜研究の話も聞けるかもしれません。入館料は無料となっています。皆様のご来館をお待ちしております。

CALENDAR

2025.12～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、(共) 共催、(後) 後援、(協) 協賛。

2025年

12月 December

(後) 三浦半島活断層調査会創立30周年記念 一般公開講座

宅地開発で隠れた衣笠断層帯を歩く

12月6日(土)(小雨決行)

<https://geosociety.jp/outline/content0255.html#12>

(後) 日本応用地質学会令和7年度技術者倫理講習会

12月12日(金) 13:30-17:00

開催方法: Zoomによるオンライン講習会(質疑応答が可能なライブ配信)

定員: 500名

登録・申込期限: 11月28日(金)

https://www.jseg.or.jp/event_news/event_news-4047/

(後) 第35回社会地質学シンポジウム

12月12日(金)～13日(土)

所: 日本大学文理学部(ハイブリッド)

https://www.jspmug.org/envgeo_symposium/35th_symposium/

材料科学シンポジウム

テーマ「カーボンニュートラル社会における火力発電用高温構造材料技術のあり方」

12月18日(木) 講演会・パネルディスカッション(会場: ベイサイドホテル Azur竹芝)

12月19日(金) 横須賀地区設備見学会

<https://egsweb.denken.or.jp/research/zairyokagaku2025/>

地質学史懇話会総会

12月20日(土) 13:30-17:00

場所: 北とびあ 803号室(東京都北区王子)

石渡 明: 江原真伍の太平洋運動(1942)の光と影

小川勇二郎: 重力テクトニクスか、水平テクトニクスか?: デュープレックス構造から考える

問い合わせ先: 矢島道子 pxi02070@nifty.com

シンポジウム『水底の文化遺産: 湖底遺跡調査の最新動向』

共催: 帝京大学文化財研究所, JAMSTEC

12月20日(土) 13:00-17:00

会場: 東京文化財研究所・セミナー室

ハイブリッド形式(対面・Zoomによる同時配信)

事前申込制: 80名(先着順、対面参加) / オンライン参加: 定員なし

参加費無料

<https://hibarajuku.labby.jp/news/detail/6464>

2026年

1月 January

(後) 原子力総合シンポジウム2025

1月19日(月) 10:00-17:00

場所: 日本学術会議講堂(東京都港区六本木) およびオンライン

参加費無料

<https://www.aesj.net/nationalsymp2025>

3月 March

文部科学省主催 STAR-Eプロジェクト第5回研究フォーラム(研究成果公開シンポジウム)

3月3日(火) 15:00-18:00(予定)

形式: オンライン開催(参加無料・要事前登録)

テーマ: 情報科学×地震学 研究成果公開シンポジウム ～知をつなぎ、地震防災技術を拓く～

https://www.mext.go.jp/a_menu/kaihatu/jishin/projects/event.html

変形・透水試験機設計セミナー 2026

3月9日(月)～11日(水)

場所: 京都大学 吉田キャンパス

<https://sites.google.com/view/designseminar2025/>

海と地球のシンポジウム2025

3月10日(火)～11日(水)

会場: 東京大学弥生キャンパス 弥生講堂

発表募集締切: 2025年12月12日(金)

<https://www.jamstec.go.jp/j/pr-event/ocean-and-earth2025/>

事務局からのお願い：会員情報に変更があった場合は、,,

自宅や勤務先等登録内容にご変更があった場合は、速やかに情報の更新をお願い致します。毎月の会誌や大切な郵便物が届かなくなってしまうます。

情報の変更は、学会ホームページ「会員のページ」にログイン(ID:会員番号, 7桁の数字です)すると、ご自身で登録内容を更新することができます。もしくは学会事務局までご連絡ください。ご協力をよろしくお願い致します。

問い合わせ：日本地質学会事務局 メール：main@geosociety.jp
電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156



地質学雑誌

公開されている新しい論文をご紹介します。ぜひJ-STAGE上で本論文を閲覧してください。QRコードからも各原稿にアクセスして頂けます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/-char/ja>

新しい論文が公開されています

論説

最北部糸魚川-静岡構造線のテクトニクス-横川断層露頭からの解析-

千葉 響, 高橋啓太, 小林健太

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2025.0021>

新潟・長野地域を通過する糸魚川-静岡構造線沿いの露頭では、多数の断層が観察される。共通してNE-SW~NNE-SSW走向・E傾斜を示し、左横ずれ正断層、左横ずれ断層、右横ずれ断層の運動が認められる。左横ずれ正断層は左横ずれ断層によって、左横ずれ断層は右横ずれ断層によって、各々切断される。また、カタクレサイト内部には黄鉄鉱やドロマイトの鉱物脈が注入し、これらを断層が切断する。断層と鉱物脈を形成した応力場を多重逆解法で求め、その変遷と形成順序に基づき、中新統以降の西南日本のテクトニクスとの対比を行った。カタクレサイトや鉱物脈の形成は、16-15 Maのフォッサマグナ地域を沈降させるNNW-SSE方向の引張と同時期に生じたと考えられる。左横ずれ正断層運動は、16-7 Maのある時期に起こったフォッサマグナ地域のさらなる沈降で生じた。左横ずれ断層は、6-3 Ma頃のフィリピン海プレートの収束に伴う可能性がある。右横ずれ断層は2 Ma頃のアムールプレートの東進に伴って形成された。



フォト

島根県隠岐の島町、乙女子海岸の流紋岩溶岩に発達する非対称ブーディン構造

遠藤俊祐, 富山旦陽, 中山瀬那

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2025.0028>



報告

山陰地方東部、鹿野断層近傍に分布するアプライト岩脈のジルコンU-Pb年代

田村友識, 小北康弘, 福田将真, 大橋聖和, 岩野英樹, 檀原 徹

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2025.0022>

Dikes form in close association with pluton emplacement and faulting. Dike ages and orientations are therefore crucial for understanding the regional tectonic evolution and paleostress fields. We discovered aplite dikes intruding the Yoshioka Granite, which are both covered by Pliocene volcanic rocks, near the Shikano Fault, the source of the 1943 Tottori earthquake (Mw 7.0). The dikes are subparallel to the Shikano Fault. U-Pb dating of idiomorphic and hypautomorphic zircon grains in the dike yielded an age of 33.5 ± 0.24 Ma (95% confidence). Considering the previously reported biotite K-Ar age of the Yoshioka Granite (~34 Ma), the aplite dikes likely intruded soon after emplacement of the pluton. Based on the results, we infer that the magma of the Yoshioka



Granite took 1-2 Myr to cool to 350-400 ° C. Our result may provide chronological constraint on the origin of the Shikano Fault.

レター

北海道に分布する蝦夷層群函淵層下部の模式地における年代制約

久保見 幸, 長田充弘, 仁木創太, 平田岳史

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2025.0023>

The Hakobuchi Formation occurs in the uppermost part of the Cretaceous-Paleogene forearc-basin (Yezo Forearc Basin) sediments in NE Japan, and consists mainly of conglomerate, sandstone, mudstone, and tuff. This formation includes several layers of transgressive lags and time gaps based on the detailed sequence stratigraphy, suggesting a remarkable unconformity at the P/E and K/Pg boundaries. We performed U-Pb age determination of zircons, and the youngest cluster (weighted average) age of zircon from a tuff sample near the Yubari Shuparo dam, the type locality of the Hakobuchi Formation, was 79.8 ± 0.80 Ma (2σ ; Campanian, Late Cretaceous). The obtained radioisotope age data and presence of ammonite fossils provide a chronological constraint on the lower part of the Hakobuchi Formation being at least partly correlated with the lower to middle Campanian. The depositional period of the Hakobuchi Formation is estimated to be lower Campanian to Thanetian (ca. 80-59 Ma; Late Cretaceous-Late Paleocene) based on microfossil reports from previous studies and the dating results of this study. The Hakobuchi Formation is a generic term for strata that vary in depositional age and depositional environments in different areas, we require further study and stratigraphic subdivision.



第132年学術大会(2025熊本)巡検案内書

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/virtualissue/100181/_contents/-char/ja



阿蘇火山の地質：カルデラ形成噴火と後カルデラ活動

宮縁育夫, 星住英夫

白亜紀北部九州バソリス：高マグネシウム閃緑岩の産状と深成岩類のマグマ供給システム

江島圭祐

長崎変成岩西彼杵ユニット中の蛇紋岩メランジュ：超高压変成岩を含む雪浦メランジュとヒスイ輝石岩を産する三重メランジュ

西山忠男, 森 康, 重野未来, 森部陽介, 西 右京

九州中部の黒瀬川帯にみられるシルル紀から石炭紀の化石群

田中源吾

天草上島および宇土半島に分布する上部白亜系姫浦層群の堆積相

成瀬 元, 小松俊文

九州東部に分布する秩父帯のジュラ紀付加体：ペルム紀～三畳紀のパンサラッサ海古海洋環境変動

尾上哲治, 武藤 俊, 富松由希

2016年熊本地震と布田川断層、地震地質災害

鳥井真之, 奥野 充, 遠田晋次

☆関東支部

お知らせ

2025年度関東支部功労賞募集のお知らせ

日本地質学会関東支部では、毎年、支部の顕彰制度に基づき、支部活動や地質学を通して社会貢献された個人・団体を顕彰しています。つきましては、下記の要領で支部会員からの推薦を募集します。

関東支部功労賞審査委員会委員長
向山 栄

記

対象者：支部活動や地質学を通して広く社会貢献をされた関東支部内に在住の個人・団体

*社会貢献や活動の評価においては、必ずしも学問的な成果を問うものではありません。

公募期間：2025年12月15日（月）～2026年1月16日（金）

選考期間：2026年1月19日（月）～2026年1月30日（金）

審査結果報告：NEWS誌・関東支部総会で報告します。

推薦方法：対象者氏名、推薦者氏名、推薦理由（400字から800字程度）を記述の上、メールの件名を「関東支部功労賞推薦」として、wordかPDFファイルをメールに添付して、下記の受付担当のメールアドレスへお送りください。

受付担当：関東支部幹事長 加藤 潔（駒澤大学）

E-mail：kiyoshi.katoh@gmail.com

☆関東支部

報告

関東支部講演会

「祝・直木賞受賞 伊与原新さん講演会
チガク アオハル ―地学は青春だ！―」開催報告

日本地質学会関東支部では、地学の魅力を若い世代に伝えることを目的として、直木賞作家・伊与原新さん（Fig. 1A）をお迎えした講演会「チガク アオハル―地学は青春だ！―」（共催：日本大学文理学部地球科学科）を、2025年10月26日（日）に日本大学文理学部百周年記念館国際会議場（Fig. 1B）にて開催しました。司会は、関東支部サイエンスカフェのファシリテータとしておなじみのサイエンスコミュニケーター岡山悠子さん（Fig. 1C）に今回もお願いしました。対象は中高生および保護者（引率教員を含む）とし、Peatixを利用した事前申込制（無料）で実施しました。

講演の冒頭では、ファシリテータの岡山さんが参加者に向けて「伊与原さんの作品を読んだことがある人！」などの幾つかの質問を投げかけ、挙手で答えてもらうアイスブレイクを行いました。これにより、参加する中高生の緊張がほぐれ、かつ、講演への流れを自然に導くきっかけとなっていました。

伊与原さんは地球惑星科学の研究者から小説家へと転身し、その専門知識を活かした数々の作品を世に送り出しています。講演では、創作の裏にある地学的視点や、科学を通じて人間を描く意義など、科学と文学をつなぐ独自の世界観を語っていただきました。さらに、地球惑星科学を志したきっかけや研究者として過ごした大学院から大学教員時代のエピソードが紹介され、続いて小説作品の制作背景を通じて、科学的リアリティをどのように小説世界へ昇華させているかが具体的に語られました。講演の最後には、伊与原さんから若い世代に向けて「進路



Fig. 1 講演当日の様子（写真提供：加藤潔関東支部幹事長）。A) 講演を行う伊与原新さん。B) 講演会場である日本大学文理学部百周年記念館国際会議場。C) 司会進行を務めた岡山悠子さん。D) 講演終了後のサイン会。

に深刻になりすぎないこと」「どんな読書や勉強も決して無駄にはならない」というメッセージが贈られました。この言葉に勇気づけられた参加者が多く、アンケートでも「人生には無駄なものなどないという言葉に安心した」「子どもの進路の考え方にヒントを得た」など、多くの共感の声が寄せられました。保護者からは「親子で講演を楽しめた」「進路選択の考え方にヒントを得られた」という感想もあり、世代を超えて地学への関心を共有できる貴重な機会を提供できたのではないかと思います。また、岡山さんによる、いつも通りの巧みな進行も安心感たっぷり、参加者からも高評価でした。講演終了後に開催したサイン会は長蛇の列となりましたが、伊与原新さんには全ての希望者に誠実に対応していただき、こちらも喜んでいただけたようです (Fig. 1D)。

本イベントには全国から162名の事前申し込みがありました。当日は天候の悪化も影響し、実際の参加者は約90名程度でした。無料イベントであったこともあり、気兼ねなく不参加と

なった方が多かった可能性があります。また、講演の終盤30分程度は会場から質疑を受ける時間としましたが、中学生よりも保護者・教員からの質問が多かったのは、イベント趣旨からすると、少し残念でした。とはいえアンケート結果からは、全体として「わかりやすかった」「地学にさらに興味を持てた」という意見が大半を占め、中学生にも、地学に青春(チガク アオハル)を感じてもらえたのではないかと感じています。

今回の講演会は、従来、関東支部がアウトリーチイベントとして開催してきたサイエンスカフェとは異なり、中学生を主対象とした新たな試みとして実施されました。伊与原さんの語りを通して、地学の魅力とその多様な可能性を次世代に伝えることができたと感じています。講演を快くお引き受けくださった伊与原新さん、司会進行を務めてくださった岡山悠子さん、そして参加してくださった全国の中高校生・保護者の皆様に深く感謝申し上げます。

(日本大学 金丸龍夫)

※
[期間限定] 再販記念キャンペーン!! ※2025年10月から2026年3月末まで

学会オリジナルフィールドノート

～ 会員・非会員問わず 800 円でお分けします～



ご好評いただいております、学会オリジナルフィールドノートの再販を開始いたします。今回増刷分より価格改定いたします。また、10冊以上のご注文には割引価格を設けました。ノートの仕様にほぼ変更はありません(しおり紐がなくなりました)。名入れサービスもこれまで同様に承ります(有料)。

ビニールコーティングの表紙は、水や摩擦・衝撃にも強く野外調査に最適です。ぜひご活用ください。

通常価格 (2026年4月以降)

定価 **1200** 円 (会員頒価 **900** 円)

(注) 10冊以上おまとめ購入の場合、
定価 1100 円 (会員頒価 800 円)

サイズ: 12×19cm,

中: レインガード紙使用, 2mm 方眼,

カバー: ハードカバー, ビニールコーティング,
金箔押し,

色: ラセットブラウン (小豆色)

ご注文・お問い合わせは、学会事務局まで

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156 e-mail: main@geosociety.jp

ICDP 2025 Training Course 参加報告

名古屋大学大学院 環境学研究科
博士後期課程2年
松山和樹

はじめに

2025年9月14日から20日にかけて、中国・渭南市でICDP 2025 Training Courseが開催された。本プログラムは、掘削科学に興味を持つ学生や若手研究者を対象とし、講義と巡検を通じて将来的なICDPプロジェクトの中核を担う研究者の養成を目指すものである。今回は世界各国から31名が参加者に選ばれ(図1)、日本からは竹岡千鶴氏(九州大)、松山和樹(名古屋大)の2名が参加した。本稿では、筆者が参加した7日間にわたるコースの全容を報告する。

国際陸上科学掘削計画

国際陸上科学掘削計画(International Continental Scientific Drilling Program; ICDP)とは、日本を含む21カ国とユネスコで構成される、世界各地の陸地や湖沼の掘削によって地球規模課題の解決を目指す国際共同研究プロジェクトである。28年の歴史の中で1000編以上の査読付き論文を生み出してきた同計画は現在、主要な科学テーマとして「地球力学プロセス」「自然災害」「地質資源」「環境変動」の4つを掲げ、掘削科学分野を牽引している。ICDPは深海掘削計画(IODP3: 地質学News Vol.27 No.8 院生コーナーを参照)に類似する枠組みではあるが、掘削提案からプロジェクトの実施/完遂までに長い年月を要すること、提案に際して国際ワークショップの開催が義務付けられていること、掘削試料の保管・管理が各プロジェクトの裁量に委ねられていること…といった特徴から、IODP3に比べ参画のハードルが高い。

そこでICDPは年に一度、若手研究者の育成と参入率の増加を目的にした独自のトレーニングコースを実施している。本稿で報告する2025年のコースは、開催時期に実際のコア掘削が行われている中国・渭南市での開催となった。

トレーニングコース

1日目は夕方の参加受付の後、アイスブレイカーが催され、中華料理や青島啤酒と共に参加者同士の親睦を深めた。筆者自身はアルゼンチンや南アフリカからの参加者と相席し、新シーズンが開幕したばかりの欧州サッカーの話題で盛り上がった。

2日目は簡単な自己紹介に始まり、午前中は「中国におけるICDPのこれまでと現状」「掘削工学の基礎」という2つの講義が続いた。本コースの開催国である中国は、これまでに6つのICDPプロジェクトを実施しており、ICDPで成功を収めている研究コミュニティの代表例としてその研究成果が紹介された。2日目の午後には「掘削技術の基礎」と「湖沼堆積物のコア掘削」に関する講義が行われた。後者では過去のICDPプロジェクトを例に取りながら、掘削提案から実施に至るまでの一連の流れ、コア掘削の流れなど、戦略やマネジメントの要点が解説された。両講義とも実用的な内容が多く、有用な知識を得ることができた。

3日目の午前中は「borehole logging」に関する講義が3時間にわたって実施された。講義は3部に分かれており、第1部は



図1 トレーニングコースの集合写真。

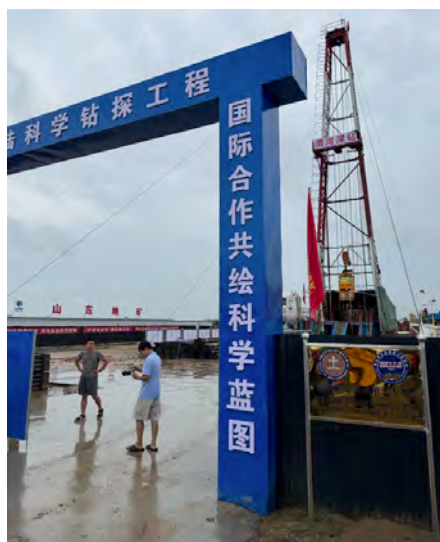
downhole loggingの基礎、第2部は測定方法や測定可能項目の解説、第3部はICDPにおける事例研究の紹介、という流れで進んだ。講義の中盤では実際のデータを用いた実践演習があり、実践的な知識技能を学ぶことができた。午後には、今年の7月から掘削が開始したWEIHEプロジェクトの掘削サイトを訪問し、掘削リグ等を見学した(図2)。掘削作業を至近距離で見学できただけでなく(図3)、1日に4本しか上がってこない掘削されたコア試料にも対面でき、見学会は大いに盛り上がった。

4日目は「ICDPの全体像」の紹介に始まり、その後は「ICDPとアウトリーチ」をテーマにした講義が実施された。ICDPの運営支援チームの代表を務めるThomas Wiersberg氏(GFZ Helmholtz Centre for Geosciences)による講義では、ICDPにおける掘削提案の流れや要点について丁寧な解説があり、質疑応答を通じた学びも多い有意義な時間となった。

5日目はバスで西安市へと移動し、巡検が行われた。午前中は秦始皇兵马俑博物館を訪れ、中国の古都である西安の歴史について学びを深めた。午後には本コースのホスト機関である中国科学院地球環境研究所を見学した。地球環境研究所は持続可能な環境管理分野の基礎研究を担う国立研究機関であり、今回の訪問では年輪・珊瑚・安定同位体・エアロゾル・環境鉱物学・年代学・古地磁気学の研究室と、コア試料の保管庫を見学した。

6日目の午前中は「掘削コア以外の試料の活用」「データ管理と試料採取」に関する講義とグループワークが実施された。グループワークではコア試料を模したエサフォームを用いて試料記載(キューレーション)の実習を行った。筆者のグループは米国・中国・台湾・南アフリカの参加者からなるグループで、各々の持つ知識や経験が大きく異なっていたがために、国や研究グループによって様々なルール・ノウハウが存在するということを、身をもって学ぶことができた。午後は「流体の採取と観測」「Outokumpu(スウェーデン)における流体研究」と深部流体に焦点を当てた講義が続いた。また6日目の夜には「打ち上げ」の晩餐会が催され、ありったけのビールと白酒に囲まれながら、最後の夜を楽しんだ。

最終日となる7日目は修了式が執り行われ、参加者に修了証と記念品が授与された。トレーニングコースは午前のセッションで締めくくられたが、午後からはICDPコーディネーターのAna Rei氏を中心に数名のメンバーが集まり、来年のトレーニングコースに向けたラップアップ・ミーティングが行われた。筆者はICDP若手運営委員会の地域代表委員(東アジア)として同ミーティングに参加し、今後の改善点等について話し合った。



(左) 図2 WEIHEプロジェクトの掘削サイトの様子.

(右) 図3 掘削リグ内の様子.

おわりに

筆者が博士後期課程で取り組んでいるのはフィールド調査を基盤とする構造岩石学的研究である。それゆえ掘削科学との関連は今のところ希薄であるが、将来的には掘削科学の国際プロジェクトへの参画を通じてマントルダイナミクスの更なる理解に挑戦したいと考えている。今回のトレーニングコースでは掘削提案に向けたノウハウを学んだだけでなく、陸上掘削へのモチベーションに溢れる同世代の知り合いを増やすことができ、とても良い経験になったと思う。

本稿ではその性質上、ICDPプロジェクトの中でも中国グループの研究成果が強調されたが、近年は日本の研究グループからの提案 (proposal) が複数採択されている。この大きな成果を受けてJ-DESCは、研究者に向けたシンポジウムと一般向け講演会「新たなICDP掘削提案に向けて 一成功を共有し、次の

挑戦へ！」を11月29日・30日に企画した (詳細: https://j-desc.org/event/20251129-30_symposium_icdp/)。同シンポジウムでは酒井雄飛氏 (京都大)・吉本剛瑠氏 (神戸大)・松山の大学院生3名が、各々が描く陸上科学掘削のアイデアを発表する予定である。掘削科学に興味のある方は、日本発の掘削研究を私たちの世代で更に盛り上げていくために、ぜひ足を運んでいただきたい。

常時投稿をお待ちしています。編集は、現在以下の6名で行っています。原稿は1500～4500文字程度、図・写真3点以内を目安に、e-mailでお送りください。

吉永亘希 (筑波大) koki9824k@gmail.com

福井堂子 (愛媛大) teco14.hm@outlook.com

會田幸樹 (東京大) aida-koki322@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

小坂日奈子 (茨城大) 23nm307s@vc.ibaraki.ac.jp

表紙紹介

第16回惑星地球フォトコンテスト：入選 危峽を貫く

写真：矢崎 煌 (埼玉県)

【撮影場所】徳島県三好市、小歩危峽 JR土讃線 (小歩危～阿波川口間)

【撮影者より】吉野川や四国山地の地層・断層によって成り立ち、様々な特徴が見られる小歩危、自然と人々の間で難工事が続いた土讃線が走ります。「歩危」は古語で川沿いの崖を意味する言葉と謂れています。自然からの大きな力が見られる小歩危は、素晴らしい景観と、地質を観察するには絶好の場所だと感じ撮影しました。

【講評・地質解説】四国の地質を縦断しながら走るJR土讃線 (多度津～窪川)。土讃線はジオ鉄として最初に取り組んだ思い入れのある路線です (加藤ほか, 2009)。徳島県三好市の小歩危展望台からは、四国山地の隆起と吉野川の下刻がつくった河川地形の絶景を展望できます。やってきたのは車両の彩鮮やかな3両編成の観光列車「四国まんなか千年ものがたり」。列車は急峻な地形を克服しながら侵食段丘 (岩石段丘) に沿って進みます。

(参考) 加藤弘徳・藤田勝代・横山俊治, 2009, ジオ鉄を楽しむ-鉄道車窓からのジオツアーの提案 (1. JR四国・土讃線), 総特集ジオパーク (2) 地球科学がつくる持続的な地域社会, 月刊地球, 31, 445-454. (藤田勝代: 深田研ジオ鉄普及委員会)

日本地質学会 キャリアビジョン誌2025掲載企業募集

日本地質学会では、本年も地質学を専攻とする国内44の大学の2,200名以上の学生と院生に日本地質学会の情報誌「地質系若者のためのキャリアビジョン誌」を送り届ける予定です。各大学では、この弊誌をキャリア教育の教材として活用頂いており、そして多くの学生・院生から専門職を知る機会になったとの声が届いており、日本地質学会は多くの若者が最新の地質学を学び、そしてその能力を活かせる職に就き、社会の発展に寄与してくれることを願っています。

つきましては、本年も協賛と原稿提供いただける企業を募集しています。

原稿形式：A4縦、PDF形式、20MB以内、塗り足しは対応しておりません。

申込締切：2025年12月19日（金）（原稿提出）

申し込み：下記フォームよりお申し込みください。

<http://photo.geosociety.jp/career2.html>

配布予定：2026年1月下旬

協賛費：3万円（日本地質学会賛助会員は1掲載地区分無料）

掲載数：のべ131社（2024年度実績）以上の見込み。地質業界最大の雑誌です！

掲載順番：全国区と地方地区とに章立てして掲載（複数地区を希望される場合は1地区あたり3万円の追加料金になります）

内容：会社の特徴、仕事の魅力、やりがいなどキャリア教育に資するものとし、採用人数や給与など具体的すぎる求人情報はご遠慮下さい。

担当・連絡先：日本地質学会地質技術者教育委員会

担当：坂口有人 arito@yamaguchi-u.ac.jp



アジアの活変動帯

木村 学・山口飛鳥

アジア地域での多彩な変動帯の進化を詳細にレビューし、最新の知見に基づいた実態を描き出す。

大陸衝突の過程はどの程度の広がりを持って進行するのか、プレート収束境界・海溝での沈み込みに伴う地震や火山活動の相互の関係、造山運動が上部そして全マントルスケールでどう進行してきたか、などについて、新生代以降のアジア地域を例として詳しく解説する。

A5判・288頁／5,060円



ヒマラヤ山脈形成史

酒井治孝

大陸衝突型造山帯ヒマラヤの最新の地球科学的研究成果を、現地調査1000日を超えるヒマラヤ研究の第一人者が紹介する。

B5判・240頁／7,920円



超巨大噴火の地球科学

大量珪長質マグマの成因とマグマシステム

高橋正樹

日本と世界の過去の事例を丹念にたどり、その原因となる珪長質マグマの成因やマグマ供給プロセスなどの解明に挑む。

A5判・400頁／5,940円



UTP 東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29 TEL. 03-6407-1069 FAX. 03-6407-1991
e-mail: order@utp.or.jp URL: <https://www.utp.or.jp/>

〈価格税込〉

2026 年度の会費払込について

一般社団法人日本地質学会 運営財政部会

一般社団法人日本地質学会運営規則（以下、運営規則）により 2026 年度の事業年度（会費年度）が始まる前までに納入下さいようお願いいたします。2026 年 4 月～2027 年 3 月の会費額は下記の通りです。

会員資格	2026年4月～2027年3分会費
正会員（シニア会員・一般会員）	12,000円（※1. 参照）
〃（学生会員） ※学生証の写しを提出した者に限る	5,000円
* 1：学生会員はバック制度による会費の納入方法を選択することができます。ただし、一括納入のみ。 2 年バック 8,000円（2026～2027年度分）／ 3 年バック 9,000円（2026～2028年度分）	
* 2：学生会員の会費は、過去年度に遡っての申請はお受けしません。	

①自動引き落としを登録されている方の引き落とし日は 12 月 23 日（火）です。

2025 年度分会費の引き落とし日は 12 月 23 日です。請求書ならびに引き落とし通知の発行は省略させていただきますのでご了承ください。これより以前に不足額がある場合には加算され、余剰金がある場合はその分を減額して引き落としとなります。通帳には金額とともに「チツカイヒ」あるいは「フリカエ」「S M B C」などと表示されますので、必ずご確認ください。

②自動引き落としをご利用ください。

新たに会費の自動引き落としをご希望の方は、10 月号ニュース誌巻末の振替依頼書をご提出ください。

一度手続きをしていただきますと、振込みのために金融機関へ出向く必要もありませんし、会費の未納防止にもなります。自動引き落としの申込は随時受付しています。今回（12 月以降に）お申込みいただいた方は、2026 年 6 月の督促請求時に引落させていただきます。

③お振り込みの方

12 月中旬頃までに請求書兼郵便振替用紙をお送りいたします。折り返しご送金下さいますようお願いいたします。

1. 在会年数（会費納入年数）に応じた会費減額について

2023 年度から、正会員は当該年度 4 月 1 日時点で「65 歳以上」のシニア会員と「65 歳未満」の一般会員とに細分しています。シニア会員と一般会員の方のうち、2025 年度会費まで未納がなく在会 40 年あるいは 50 年（連続年数でなくても合計年数でも可）に達した場合は、2026 年度以降の会費からそれぞれ会費減額を行います。

・在会 40 年以降 11,000 円（1,000 円割引）

・在会 50 年以降 10,000 円（2,000 円割引）

本割引制度は、申請や手続きは不要です。何卒ご承知おきください。

2. 除籍対象年数の規則変更について。長期滞納者の会員はご注意下さい。

運営規則の一部改正（2022 年 6 月）により、除籍対象となる滞納年数が『滞納 4 年度目』から『滞納 3 年度目』に変更となりました。該当する方には個別にご案内することとなりますが、くれぐれもご注意下さい。

運営規則第 7 条（会費）第 4 項（4）

（4）会費支払いの督促を受けつつ、正当な理由なく、かつ、退会届を提出せぬままに会費を滞納した会員は、**滞納 3 年度目**をもって、理事会の議決により会員の資格を喪失させ除籍とする。

3. 災害に関連した会費の特別措置

災害救助法適用地域で被災された会員のご窮状をふまえ、「日本地質学会に届出の住居または勤務地が災害救助法適用地域に該当する会員のうち、希望する方」は当年度（もしくは次年度）の会費を免除いたします。希望される方は、学会事務局までお申し出ください。

（参考）内閣府 HP：災害救助法の適用状況

https://www.bousai.go.jp/taisaku/kyuujo/kyuujo_tekiyou.html

会費についてご不明な点がある場合やその他確認したいことがある場合は、日本地質学会事務局へお問い合わせ下さい。

(e-mail : main@geosociety.jp / FAX : 03-5823-1156 / TEL : 03-5823-1150)

入会のご案内

入会ご希望の方は下記の入会申込書を一般社団法人日本地質学会事務局へお送りください。
入会には正会員1名の紹介が必要です。近くに紹介者となるべき会員がない場合は旨お申し出ください。また、初年度の会費は申込書郵送時から時間の間隔をおかずに下記送金先へ速やかにご送金ください。会員としての正式登録は、入会承認後、初年度会費の入金を確認した上でを行い、News誌の送付(4月号から)を開始いたします。

申込書郵送先: 101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F 一般社団法人日本地質学会
会費送金先: 郵便振替口座 00140-8-28067 一般社団法人日本地質学会
ゆうちょ銀行 ○ー九(ゼロイチキョウ)店/当座 0028067 / 一般社団法人日本地質学会 シヤニホシツガツカイ
会費年額: 正会員(一般会員・シニア会員) 12,000円 ※1
正会員(学生会員) 5,000円/年、2年パック会費額: 8000円、3年パック会費額: 9000円) ※2
ジュニア会員 0円(年会費不要) ※3

※1: シニア会員は、入会年度の4月1日時点で65歳以上のかたを対象とします(4/2以降に65歳になる方は次年度からシニア会員となります)。
※2: 学生会員は、次の2点を守って手続して下さい。①学生証の写しを提出すること。②バック制会費を希望の場合は一括納入すること。
※3: ジュニア会員は、正会員の権利は有しません。学術大会での発表はジュニアセッションに限定します。

* 会員番号	* 会員種別 <input type="checkbox"/> 正会員 <input type="checkbox"/> 一般 <input type="checkbox"/> シニア <input type="checkbox"/> 学生 <input type="checkbox"/> ジュニア会員
--------	--

一般社団法人日本地質学会入会申込書

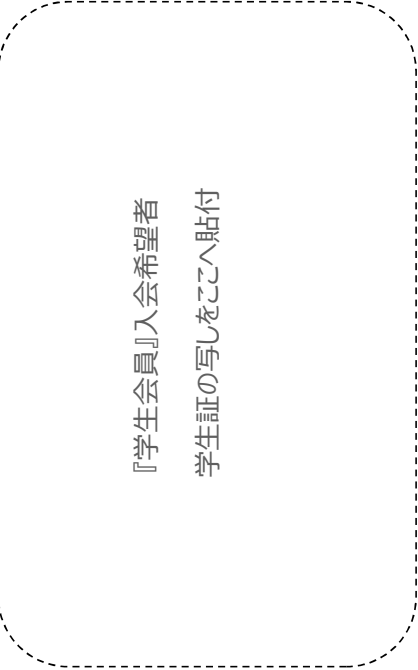
Application form for the Geological Society of Japan

本枠内のみにご記入ください

氏名(ふりがな)	Name in Japanese	ローマ字表記	family name	first name
____年____月____日	Year Mo Day	生	born on	Country:
性別: <input type="checkbox"/> 男 Male <input type="checkbox"/> 女 Female				
学歴 Academic career:				
____学校 High school ____年卒業 Year completed				
____大学 University ____学部 Faculty ____年____月卒業(見込み) Year completed				
修士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月修了(見込み) Year completed				
博士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月修了(見込み) Year completed				
※学生証の写し忘れずに添えて下さい。				
自宅住所 Home address: (郵便番号 Zip code ____ - ____)				

電話 Phone: ____	ファックス Fax: ____
所属機関名称・所属機関住所 Affiliation with address: (郵便番号 Zip code ____ - ____)	
※郵便物がきちんと届けられるよう、ご記入ください。	
電話 Phone: ____	ファックス Fax: ____
e-mail Address: ____@____	
※e-mail Addressは地質学会からのメルマガ配信用。その他連絡用に登録します。携帯電話各社のe-mail Addressを記入の場合は登録いたしません。ご注意ください。	
※所属先(代表)の問い合わせ専用 e-mail Address は記入しないでください。	
連絡先 Correspondence: <input type="checkbox"/> 自宅 Home <input type="checkbox"/> 所属機関 Office	

* 受付 (____年 ____月 ____日)	* 承認 (____年 ____月 ____日)
* 入金 (____年 ____月 ____日)	* 振替・現金・銀行・他
* 送本 (____巻)	* 号



会員情報について: 在会者に限定し、Web版の会員管理システムにて会員情報の検索・閲覧をすることができます。氏名・所属先は掲載必須項目です。下記の項目について掲載を拒否する項目には **□ にチェックを付けてください(チェックが無い項目は掲載承認いただいたものとします)**。

<input type="checkbox"/> 最終学歴 <input type="checkbox"/> 所属先学科名・部課名(掲載不可の場合は「〇〇大学〇〇学部」, 「株式会社〇〇〇〇」までを必須項目として掲載)
<input type="checkbox"/> 所属先住所 <input type="checkbox"/> 所属先電話・FAX番号 <input type="checkbox"/> 自宅住所 <input type="checkbox"/> 自宅電話・FAX番号 <input type="checkbox"/> e-mail Address
紹介者名(正会員) _____ 印
Recommended by (name of member) _____ Signature

(学生のかた) 希望する会費額を選択して下さい。バック制会費選択者は、該当するバック制会費額を一括納入して下さい。
<input type="checkbox"/> 5,000円(初年度のみ) / <input type="checkbox"/> 2年バック: 8,000円(初年度・次年度) / <input type="checkbox"/> 3年バック: 9,000円(初年度・次年度・次次年度)
<input type="checkbox"/> 学生会員として入会希望です。学生証の写しを入会申込書に添えて提出します。

専門部会の選択(任意)
現在、下記の14の専門部会が有り活動しています。専門部会に参加ご希望の方は登録をお願いします。所属希望の部会を3つまで選択することができます。(該当する項目に○印を付けて下さい)

- | | | | | | | | |
|---------|----------|---------|-----------|-----------|----------|-------|---------|
| 1. 地域地質 | 2. 層序 | 3. 堆積地質 | 4. 海洋地質 | 5. 構造地質 | 6. 岩石 | 7. 火山 | 8. 応用地質 |
| 9. 環境地質 | 10. 情報地質 | 11. 古生物 | 12. 第四紀地質 | 13. 環境変動史 | 14. 鉱物資源 | | |

興味専門分野の選択(任意) あなたの興味専門分野を教えてください。3つまで選択することができます。(該当する項目に○印を付けて下さい)

- | | | | | | | |
|-----------------|-----------|----------|----------|-----------|----------|----------|
| 1. 層位 | 2. 堆積・堆積岩 | 3. 古生物 | 4. 構造地質 | 5. 火山・火山岩 | 6. 深成岩 | 7. 変成岩 |
| 8. 鉱床地質(金属・非金属) | 9. 鉱床 | 10. 鉱物 | 11. 燃料地質 | 12. 地熱 | 13. 第四紀 | 14. 環境地質 |
| 15. 都市地質 | 16. 土木地質 | 17. 土質工学 | 18. 水文地質 | 19. 探査地質 | 20. 土木工学 | 21. 情報地質 |
| 22. 地震地質 | 23. 海洋地質 | 24. 地球物理 | 25. 地球化学 | 26. 地質年代学 | 27. 地理 | 28. 地学教育 |
| 29. 考古学 | 30. その他 | 40. 地球惑星 | | | | |

(注) ご提供いただいた個人情報は、日本地質学会プライバシーポリシーに基づき適切に取り扱います。

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003 年 9 月 19 日 日本地質学会総会制定

2009 年 12 月 5 日 一般社団法人日本地質学会制定 *

日本地質学会の会員は、科学的真理を明らかにする事を目的として、誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う。その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り、もって社会の発展と人類の福祉に貢献する。会員は、基本的人権を守り、良識かつ品位のある行動をとる。

1. 科学者としての倫理：会員は、専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る。研究と調査においては、法を遵守し、社会的良識に従って行動する。科学的事実に対しては常に謙虚、誠実でなくてはならない。研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し、公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する。

2. 知的交流の確保：会員は、国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに、研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める。

3. 人類と社会への責務：会員は、その専門知識と技術を適切に活用し、研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する。

日本地質学会

4. 地球環境への責務：会員は、地球システムの諸現象についての専門家として、地質災害の予知と防止、地球環境の将来予測、資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに、専門知識を活かして環境の保全と改善に努める。自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する。

5. 次世代への責務：会員は、地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展、次世代を支える人材の育成を図る。研究や調査の成果物、重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める。

*2009 年 12 月 5 日法人理事会において、一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定。



応募締切

2/1(日)

2026

第17回

惑星地球 フォトコンテスト

最優秀賞 5万円

その他多数賞

優秀賞 2点,
地質学会賞 (学会員)
入選 数点

スマホ賞
ジオ鉄賞
大学生 / 大学院生賞
小 / 中 / 高校生賞

大地が残す 風景・自然美

地層・岩石・化石, ジオパーク, ジオ鉄

申し込み方法 photo.geosociety.jp

WEB 応募, 郵送応募いずれも可
郵送は同日必着



お問い合わせ

日本地質学会事務局
Tel 03-5823-1150
mail: photo@geosociety.jp

主催: 一般社団法人日本地質学会

協賛: NPO 法人 日本ジオパークネットワーク
深田研ジオ鉄普及委員会
株式会社 ウインディーネットワーク

Permian red shale, Cribas Formation, Timor-Leste
Photo by S. Kiyokawa